

『バクに食べられた夢』

緋片イルカ 作

四〇〇字原稿用紙換算 一四八枚

第三稿 二〇二〇年三月三十一日

何か、とても大切なことを忘れているような感覚のまま、僕は目を覚ました。

隣室から物音がしたような気がした。夢の中で聞いたのか、現実で聞いたのか判断できなかった。耳を澄ませたが、外で鳴いているアブラゼミしか聞こえない。

隣の部屋は母さんの寝室だ。正しくは母さんと父さんの寝室。父さんは仕事に行ってるから今はいない。とすると物音は母さんだ。（あの女が何をしていようが関係ない。けれど見に行かなくてはならない）

“行かなくてはならない”だって？ どうして行かなければならない”のか。

僕は体を起こす。どうやら床で眠ってたらしい。下敷になっていた左半身が強ばってる。

パソコンのモニターは省電源で画面は真っ暗になっているけどゲームは繋いだままだ。いつもどおり。テーブルにはコントローラー。その横に飲みかけのコーラのペットボトル。

（あの物音はおそらく…）

崩れた音だった。積み重なった本が崩れたような。母さんがこれまで積み上げてきたものが、何かの拍子に崩れ落ちたのだ。くぐもった声も聞こえた。んんっ、という突発的に悶えた声だった。それがどうい声なのかも僕にはわかっていた。その想像が正しいかどうかを確認するために行かなければならないんだ。

廊下——といっても二つの部屋と物置を繋いでいるだけの短い二階廊下に、頭だけ出して聞き耳を立てた。何も聞こえない。一階に気配を感じない。母さんはやはり隣室にいる。

忍び足で、閉じられた寝室へ近づく。
ノックをするか？

（もはや、そんなことをしてもムダだ）

怒られるぞ？

（いや、怒られない）

アブラゼミが一斉に鳴き止んだ。

僕はドアノブを回して、扉を肩で押した。

食む音がする。くちやくちやと動物が何かを食べている。うちでペットは飼っていない。

部屋は半分無くなっていた。無いというのは壁や床が壊れているという意味じゃなくて、無くなって真っ暗なんだ。虚無にのみこまれたみたいに何も無い。光を吸い尽くしたblack holeみたいに、そ

こだけぽっかりと穴になってるようだった。

その暗闇の端っこに四足歩行の動物がいた。体は白と黒のツートンカラーに分かれていて上半身は黒く、下半身は白い。それがマレ―バクという動物だというのは――たしか凶鑑で見たことがある。バクが細長い口先で床を噛ると、噛られた床は無くなった。

「バクは夢を食べるのよ……」

闇の奥から母さんの声が出た。

「母さん？ その中にいるの？」

「タ……」

バクはもう部屋の半分以上を食べ尽くしていて、母さんも食べられてしまったんだ。この寝室で何があったのか、もうわからなかった。母さんの姿も、記憶から抜け落ちたように、もう何も見えなかった。

6歳

ぼくは目を覚ました。ベッドに寝ている。部屋は暗い。カーテンが閉まっているんじゃない。目を瞑っている暗さでもない。光りというものが無い暗さだ。起きたようで起きていない。ぼくはまだ夢の中にいる。寝ぼけてるんじゃない。夢から覚めた、という夢を見ているんだ。

そう思うのには三つの根拠がある。

ひとつめは目覚めたという記憶がないこと。それは、とても奇妙な論理ではあるのだけれど、こういうことだ。

昨日の夜、ぼくは眠りについた。いつものようにゲームをしていて、くたびれて横になった。眠りに落ちていく感覚は覚えている。けれど起きたという記憶がない。ということとはつまり、ぼくはまだ眠っているのである。眠った状態であれこれと考えている、ここは夢の中である。そういう論理だ。へりくつだと言われるかも知れないけど、夢の中では思ったことと考えたことに隔たりがない。

たとえば「林檎を食べたいな」と思うのか考えるのか、頭に浮かんだ次の瞬間、母さんが林檎を剥いてるシーンになる。林檎という言葉が連想してシーンへ跳ぶんだ。

どこかの病室みたいだ。男の子がベッドで寝ていて、そばでパイプ椅子に座っているのは母親だ。それを映画のワンシーンみたいに見ている。ベッドの男の子はぼくだと思おうと、視点はベッドの上に移る。ショットが切り替わるように思ったり考えたりした瞬間には、それが実現している。それがぼくの夢のしくみ。ぼくは夢の世界の映画監督みたいなもんだ。

母さんは林檎を剥いている、と思うと母さんの白くて細い指が見える。左手に林檎をもつて、右手の果物ナイフを回して、赤い艶々した皮をうすく削いでゆく。削がれた皮は切れることなくDNAみだいに螺旋に垂れて、床でとぐるを巻く。林檎と蛇つてどこで見たんだっけか。

「さあ、剥けたわよ」

フォークに刺さった林檎を、母さんが向ける。

「ハルヒトくん。あーっーん」

例のごとく、おいしそうだと思った瞬間には食べたのと同じで、口内に酸味が広がる。

意識は「思う」と「考える」だけじゃなくて、肉体的に「感じる」ことすら区別しない。きみ、そんなバカなって思っただろう？

(ん、きみって誰のことだ？)

肉体的な感覚については、そうだな、足の指の上に鉄筋が落ちてきたのを想像したらわかるだろう。ほら、工事現場でクレーンが吊り上げてる長い鉄の棒があるだろ。横から見るとエの形をしている。それがきみの足の指の上に落ちたって想像してごらん。

(また、きみと言っている……)

ダンスの角に小指をぶつけただけで、ぼくらは声を上げて痛がるだろう。あれは痛いよな。それが鉄筋だとしたら……。

医師がレントゲン写真——あの黒いフィルムに骨や内臓が白く写るあれを光に透かしてみると、小指が真っ黒に塗り潰されている。骨は粉々に砕けてなくなっているんだ。

「痛みますよ」

そう言いながら、医師は耳朶みたいに芯のなくなった小指を捏ねくり回す。

「痛いかい？ ふつうはこんな方向は回らないもんな？」

小指を折り返すと爪が甲の皮膚についた。それから、三六〇度に回しながら、

「すごいな。くるくる回る。ほらほら。自分でも見てごらん。君の

小指はもうすっかり役立たずだよ」

「先生、やめてください」

「なんだ、痛いのか？」

「痛いです」

「なんだか膨らんできてるな。興奮してるのか？」

「ちがいます。腫れてるんです……」

「本当か？ 本当はこんなことされて気持ちいいじゃないのか？
なあ、どうなんだ？」

「うう…：先生、本当にやめてください…：」

これがつまり、夢でも肉体的な痛みを感じるってことだよ。ぼくはきみの身体には指一本触れてない。サディステイックな医師だつて想像の産物だ。そもそも、きみはタンスの角にぶつけてもいないし、鉄筋が落ちてもない。なのに痛いんだ。他人の痛みに興奮する変態もいるけどね。

ところで何の話だっけ？

何か大切なことを忘れている気がするんだ。林檎じゃない。もつと前だよ…：林檎を剥いてくれたのは母さん…：母さんは…：母さんはバクに食べられた！ はやく母さんを助けないと！

(でも、あれは夢だった…：)

そうだ。夢だ。でも、これも夢じゃなかったか？ ぼくは最初にそんなことを言っていた。三つの根拠があるとかどうとか。夢に囚われているのか。

(あの時、何か聞こえた…：)

そうだ。暗闇の中から母さんの声がした。

「タ…：」

母さんはあの時、何か言ったんだ。やっぱり「助けて」だろうか。母さんはバクの胃の中で溶かされているのかもしれない。「戦え」かもしれない。あのバクとか？ ロールプレイングゲームみたいにバクを倒して母さんを助け出せば、この夢から抜けることができるのかも。それじゃ、ここはゲームの中？

(同じことだよ)

そうかもしれない。夢でも、記憶でも、ゲームでもぼくの意識が感じているものは同じだ。ここが現実だとしても、映画や小説のよいうな物語の世界かもしれない。ぼくを読んでいる読者がどこかにいて、その読者からしたら、ぼくがいるのは夢でも現実でも同じだ。どっちみち虚構なんだから。ただ読者が知りたいのは、バクに食べられた母さんがどうなったのか。

(だから見に行かなくてはならない)

そういうことなんだ。読者のためだけにじゃない、この夢から覚めることは、ぼく自身の問題でもある。それで、なんの話だっけか…：医者だ。なんで医者が出てきたんだったか。ぼくが医者を目指していたって話だったね。

(きみが医者？ ははは、まさか、ありえない)

幻肢痛って言葉は聞いたことあるかい？ 無いはずの腕や足が痛む現象だよ。事故とか病気とか戦争とかで、腕や足が腐って切断しなきゃいけないことがあるだろ。生きるためには切るしかない。麻

酔で眠っているうちに手術は無事におわって、病室のベッドに戻される。目を覚ます。切られたはずの——たとえば左足の感覚がまだ残っている。

（おかしいな。手術はまだかな？ それとも足を切断するなんて悪い夢だったんじゃないか？ そうだ！ そうに決まってる！）
ブランケットをめぐって絶望する。夢じゃなかった。生まれてからずっと存在していた自分の一部が欠損している。二本しかない足にいかにか支えられて生きてきたのかを思い知る。

（ああ、ぼくの足がない！ でも感覚はあるじゃないか！ 痛い。痛い。左足が痛い。ぼくの足を返してくれ！ 医者はどこだ！）

幻肢痛は英語で Phantom Pain というんだ。こっちのが夢っぽくていいだろ。フアントムペイン。悪夢みたいな響きだ。この亡霊に取り憑かれると、ありもしない足が痛む。切られた奴だけじゃない。そもそも無いはずの第三の足を切られたと思ひ込んで痛むんだ。変だと思うか？ だけど人間なんてありもしない「こころ」なんてものを傷つけられたと痛がってるじゃないか。

こんな実験がある。
六歳の男の子の実験で——アメリカの実験だったかな。ドイツかもしれない。とにかく日本じゃない。だから男の子の名前は忘れてしまった。仮にハルヒトくんとしておこう。彼は四角い部屋に入れられた。実験のために作られた三メートル四方の立方体で、ドアを閉めると完全に暗闇に包まれる。窓はおろか、光が射し込む隙間すらない、完全に密閉された部屋なんだ。じつは窒息しないように天井には換気口がついていたけど、光がないから見えないし、六歳の子どもに届く高さではないので、ハルヒトくんにとっては無いのと同じだ。壁は防音機能をもったクッション素材でできている。体当たりしてもやさしく弾き返されてケガすらできない。

この箱はハルヒトくんの自我を目覚めさせるために作られた。彼は眠っているうちに入れられた。目を覚ますと、箱の中にいるんだ。そこがどこなのかわからない。光もないし、起きているのか夢の中なのかすらわからない。大人だって恐怖だろ？ ましてや六歳の男の子だよ。彼は状況の不思議さにきよんとしていた——ちなみに中の様子は暗視カメラで実験者には見えるようになっていた。やがてハルヒトくんは、たどごとでないと感じて泣いた。ママ、ママ、助けて。パパとは呼ばない。六歳の子どもにとって世界で信用できるのはママだけさ。

ハルヒトくんは十分ほど泣きつづけてから、とつぜん泣き止んだ。泣き疲れたのもあるが、ママはもういないのだと気づいた。こ

のまま泣いていても誰も助けてはくれない。自力で脱出するしかない。自我の目覚めだ。

うろちよると動きまわった。冒険の始まりだ。壁にぶつかるとう向を変えて、ビリヤードの玉みたいにあっちへ返り、こっちへ返り、そうしながら、この部屋のしくみを理解しようとした。そして絶望した。どうあがいても、ここからは出られないと悟ったのだ。

この実験の本当の目的はここからだ。

途方にくれて、ぼかんと口をあけて座りこんでいるハルヒトくんは生きる気力を失ったようだった。そこへ実験者が声をかける。

「聞こえるかい、ハルヒトくん。君がこの箱から出たいのなら、ある痛みを耐えなければならぬよ。それは君のおちんちんを切り取ることだ。どうして、そんなことをしなくちゃいけないのかって不思議に思うかもしれないけれど、それがこの世界でのルールなの。さあ、どうする？ 君はずっとこの暗闇の中で生きていくか、おちんちんを切り取ってでも外の世界に出るか、どっちを選ぶ？」

ハルヒトくんが驚いたのは、その内容よりも声だった。その声がよく知った声だった。さっきまで泣きながら助けを求めた相手、そばにはいない、いるなら助けてくれるはずだと思っていた母親の声だったんだ。ハルヒトくんは世界で信用できる唯一の存在に裏切られたんだ。

こんな残酷な実験ありえない？ けれどハルヒト実験は本当にあったんだ。論文もないし実験が行われたことすら公表されていないから、世間ではなかったことになっているけど実験はあったんだ。どこにあるかといえど、ここにあるんだ。ぼくの記憶の中に。妄想かもしれない。ここは夢の中だからね。作り話だといえど作り話だし、それでも夢の主であるぼくにとっては現実とまったく同じ痛みを伴っているということ。それに日本の実験じゃないって言っただろ？ 世界のどこかには想像もつかないような残酷なやり方で人を苦しめる人たちがいるんだよ。

この実験でハルヒトくんはインポテンツになった。肉体的におちんちんが切り取られることはなかった。さすがにそんなことはしない。母親は虚勢不安に打ち克つ強靱な自我を持ってほしいと思っ、あんなことを言ったんだ。でも、ハルヒトくんは精神的に去勢された。

フアントムペインの反作用だ。肉体的にはおちんちんがあるのに、もう切り取られてしまったような気がして機能を失ったんだ。

ところで、何の話だったっけ？

(ここが夢の中だったという根拠が三つある。ふたつめにいけよ)

ああ、そうだったね。ふたつめは母さんが——ああ、そういう夢なんか見たことがないと言い切る人がたまにいるだろ。昨日、どんな夢見たって聞くと、カエルが豆鉄砲でも食ったような顔して、見ていないって言うんだ。見ていないだよ？ 憶えていないじゃないやなくて、見てないって言うんだ。

そういうタイプはベッドで目を閉じて眠りに落ちた次の瞬間には、もう朝になっていて活動を始めるんだろうか。それって眠りというより瞬きみたいだよな。まぶたを瞑る前は夜だったのに瞬きしたらもう朝になっている。次の瞬きではまた夜になって、カメラでシャッターを連写するみたいにカシヤカシヤカシヤカシヤ一日が過ぎ去っていく。

羨ましい気もするよ。ぼくみたいに夢に囚われて抜けられなくなる気持ちなんてわからないんだろうな。ぼくには昨日のぼくと、明日のぼくが同じ人間だという自信すらない。自己同一性とかいう感覚が保たれる自信がないんだ。寝る前は人間でも、ある日、起きたら巨大な虫になってるかもしれないし、蝶々になってひらひら飛んでいるかもしれない。そしたら、本来、虫やら蝶であるぼくが、束の間、人間になった夢を見てたことになるんだろ。夢を見ない人は、こんな実存不安に苦しむことないんだろうな。

（なあ、はやく、ふたつめの根拠を話してくれないか）

いや、わかっているさ、言わなくてはいけないことはわかっている。きみがそれを待っているのも、わかっているんだ。だけど、ぼくは……そのことを言おうとすると、なんていうか、関係ないことを話し始めてしまうんだ。本音をいうと、それを言葉にするのが怖いからなんだ。

だけど、そろそろ時間だ。目覚し時計が鳴る。ニワトリの鳴き声が聞こえる。朝日が昇り、窓の外が明るくなってくる。

ぼくはどこにいる？

「ベッドにいる」

と、考えてみればベッドにしていることになる。今までの思考は、すべてベッドの中で考えていたということになるのだ。ここはぼくの部屋だ。

ノックする音。

「ハルヒトくん、起きる時間ですよ」

母さんの声だ。

これがふたつめの根拠。死んだはずの母さんが生きているということ。

ぼくの家は二階建てだ。

新築の建て売り一軒家。引っ越してきたのは七年七月七日。七七
七でよく憶えている。

二階には二部屋あって、母さんの寝室とぼくの部屋。ぼくに兄弟
はいない。あと廊下には物置がある。え、知ってるって？ もう話
したっけ？

「ハルヒトくん、朝ごはんの準備、できてますよ」

母さんがもう一度、ノックした。

ぼくがドアをあけると、たった今までドアの前にいたと思った母
さんは、もう一階のリビングキッチンにいるようだった。もともと
そこにいたような気もする。とにかく一階にいる。それが気配でわ
かる。

（行かなくちゃ）

そう考えると、ぼくはもうリビングキッチンのテーブルに座って
いた。

正方形のテーブルがあって、一辺はキッチンカウンターの壁にく
つついている。残りの三辺のうち、真ん中がぼくの席で、右が父さ
ん、左が母さんの席だ。母さんの席はキッチンエリアから料理を運
んだりするとき動線が少なくなる席でもある。父さんの席は奥つ
てかんじ。

（おはよう）

父さんの目がぎろつと動いて、ぼくを見た。父さんは言葉を喋れ
ないけど、目でそう言っていた。

「おはよう、父さん」

ぼくは声を出して朝の挨拶をした。

「父さん、今日は変な夢を見たんだ」

（どんな夢だい？）

「動物が出てきた」

（どんな動物だい？）

「うん……小さい頃に見た動物のような気がするんだけど思い出せ
ない……なんで夢って起きるとすぐに忘れちゃうんだろう？」

（さあ、私は夢を見たことないからな）

目の前にボウルを置かれて、顔をあげると、母さんが見下ろして
いた。不機嫌なときの顔。母さんには三つしか顔がない。不機嫌な
顔と怒っている顔と呆れた顔。

「独り言いってないで、はやく食べなさい」

「父さんと話してたんだよ」

「何言ってるの。あなたに父さんはいないでしょ」

呆れた顔になった。この顔は気をつけないといけない。母さんの顔は、いつもは不機嫌な顔で、次の段階になると呆れる。いきなり怒ることはめつたにない。母さんはやさしいからね。たいていは呆れる。呆れてから怒るんだ。

母さんが呆れるときはぼくが失敗したときだ。せつかく母さんが入れてくれたミルクをこぼしたり、靴紐を結び直したのに締め方がゆるくて、すぐに解けちゃったり、テストの点数が悪かったときに母さんは呆れる。溜め息をついたり腕を組んだりしながら、ぼくがこぼしたミルクを拭くのをじっと見ている。手伝ってなんかくれない。ぼくがこぼしたんだからね。そこで、失敗すると怒り顔が出る。コップを落として割っちゃったり、ミルクを吸ったナプキンから雫が落ちて、クッションを汚しちゃったりしたときだ。呆れ顔は、怒りの前の警告なんだ。だからぼくは気をつけないといけない。

「いただきます……」

ぼくは用意された朝食に集中することにした。ボウルにはスクランブルエッグと輪切りのゆで卵と目玉焼きが入っていた。隅にはマヨネーズが小指分ほど塗られていた。ぼくはマヨネーズを少しずつつけながら、いろんな卵を食べていく。

横目で父さんを見ると、父さんの席には人形が座っていた。デスクの練習に使うモデル人形である。関節が自由に動くようになっている。いろいろなポーズの参考にする木目の人形。Drawing Boothというんだ。ドロイイングドール。いい響きだろ？ 夢の中ではカタカナの方がしっくりくるし、いかにもぼくの父さんってかんじがする。

(ごめんな、ハルヒト。母さんに怒られちゃったな)

父さんの目が動いた。ぼくは気づかないふりをした。父さんは父さんの席からずっと動かない。体の芯になってるバネが弛んで、腕も足も力なく垂らしたまま座りつづけている。頭も俯いたまま垂れている。酔っ払ったサラリーマンが居眠りしてるみたいでみっともないから、ぼくはときどき、父さんの頭を持ちあげてイスの背もたれに乗せてあげる。でも、首が据わってないから、ぼくや母さんがテーブルにぶつかった弾みで、またコクつてうな垂れてしまう。直そうとすると、母さんは起こしてもムダだって不機嫌に言うけど、ぼくは何度も起こす。それは母さんへの抵抗みたいなものでもあるけど、何より、父さんにはしっかりと首を起こして前を向いていてもらいたいんだ。

父さんには顔もなかった。

目も鼻も口もない、つるつるのつぺらぼうだった。だから、ぼくは油性マジックで書いてあげた。ぼくが小学校に入る前のことだった。例のハルヒト実験よりも前だった。

目といっても、楕円を書いて真ん中を塗り潰して目玉をつくっただけの子供の描く目だった。いまなら、もう少しまともな目を描いてあげられるかもしれない。でも、父さんはぼくの幼稚な絵でも喜んでくれた。手や足は動かさないけど、目玉だけは自由に動かせるようになった。やがて、その目で父さんの考えていることがわかるようになった。母さんには聞こえないらしいから、テレパシーみたいに見えるかもしれない。でも、ぼくらはちゃんと会話しているつもり。

誰かが声にした言葉って、聞いた人の頭の中で再生されて初めて理解されるだろ。うまく聞き取れなくて、再生できないときは「いま何て言った？」って聞き返す。だから人間って誰かと話しているようで、ほんとうは一人で話してるだけなのかもしれない。そうすると母さんの言うとおりに、ぼくは独り言を言ってるだけなのかもしれない。

(卵はおいしいかい?)

父さんがまた話しかけてきた。ぼくは頷いて答えた。

「すこし飽きたけどね。ほんとうはハムとかブルーベリーのジャムのついたパンとか食べてみたい」

母さんが離れた隙に小声で言った。

ドロイングドールの父さんに鼻や耳も書いてあげようとしたこともあったけど、母さんに怒られてできなかつた。だから、父さんは目玉で話せるけど、歌を口ずさんだり口笛を吹いたりはできない。「時間切れよ」

母さんが言った。

ボウルの卵料理は生卵にもどっていた。掻き混ぜた黄色い液体。大人になることはできない食べるためだけに産まれた無精卵。

「ごちそうさまをしない」

「ごちそうさまでした」

ぼくは両手を合わせて卵を拝んだ。母さんはボウルをとって、中身をゴミ箱に叩いて捨てた。はやく食べなかつたぼくが悪い。

「はやく準備しなさい。遅刻するわよ」

壁には白と黒のアナログ時計が架かっている。数字はなくて白い丸に黒い針が二本あるだけの飾り気のない時計だ。針は7時32分の向きを指していた。けれど、長針と短針が同じ長さなので6時40分にも見える。どっちが正しい時刻なのか、ぼくにはわからない。

ただ、母さんが遅刻すると言うのだから、7時32分なんだと思う。学校に行く時間だ。

そう考えた次の瞬間、ぼくは玄関に移動していた。ランドセルも背負っている。

（忘れものはないか？ 大切なものを忘れていないか？）

ぼくはスニーカーを履いてから、何かを思い出そうとして立ち尽くしてた。

（三つ目の根拠だ！）

すると、背後からクラクションが鳴る。玄関に止めた車の運転席から母さんが鳴らしているのだ。

（行かなくてはならない）

母さんの元にか？ それとも三つ目の根拠を探しに二階に？

クラクション、クラクション、クラクション。執拗に鳴る。

ぼくは助手席に座っていた。運転席の母さんは、道路を塞いで歩く小学生の集団にクラクションを鳴らしている。

「ハルヒト、この前の模試、まだ返ってきてないの？」

「そんなに早く出ないよ」

ぼくは嘘をついた。

「医学部ならどこでもいいなんて思ったらダメよ。最低でも偏差値75以上のところじゃなきゃ行かせないわよ」

「わかってるよ」

ぼくは母さんの方は見ずに、スマートフォンでメールを打っていた。

（おかしいじゃないか。きみが高校生のころには、まだスマートフォンなんてなかったじゃないか。当時のきみは今というガラケーを使っていたはずだ）

言われてみればそうだ。でも記憶が曖昧なんだ。ガラケーなんて言葉も当時はなかっただろ？ 新しい言葉ができる、その当時なんて呼んでいたかが曖昧になってくる。思い出す度に、ぼくの記憶は上書きされて、本当はどうだったのかなんて、もう思い出せなくなってくる。

「……なのよ。ハルヒト、聞いてるの？」

考え事をしていて母さんの言葉が耳に入ってなかった。母さんの顔が「呆れ」になっているのに気づいて、

「聞いてるよ」

と、また嘘をついた。十六歳にもなると、そういう悪知恵もついてた。

携帯の画面には「まりあ」という相手からのメールが届いていた。

初めてできた彼女だった。

「そのまま行くと死んじゃうよ」という、まりあからのメール。

「でも、行かなくてはならないんだ。きみも一緒に来てくれないかな？」

「わたしは行けない。ハルヒトのことは好きだけど、一緒には行けない」

車が急停止して、シートベルトが締まった。

前をみると杖をついた老人が横断歩道を渡っていた。母さんがクラクションを鳴らしたが、老人は聞こえていないか、こちらを見向きもせずゆっくりと横切っていく。

「誰とメールしてるの？」

「友だちだよ。クラスの友だち」

「名前は？」

「ただの友だちだって」

「女の子じゃないでしょうね？」

「ちがうよ」

三つ目の嘘をついた。

「セックスなんて許しませんからね」

「そんなことするわけないだろ。まだ高校生なんだから」

「ほんとうかしら」

母さんは左手をぼくの股間へ伸ばしてきて弄った。

「クラスの女の子のことを考えて、へんなことしてるんじゃないの？」

「していないよ」

ぼくが勃起しないことを確認すると、母さんは満足したように左手をハンドルに戻して念を押した。

「セックスなんて許しませんからね」

「母さんは欲求不満なんだよ」

母さんがキッとぼくを見た。般若のような怒り顔が張りついていて。しまった、と思ったときにはもう遅かった。

「そうね。欲求不満なのよ」

母さんは正面に向き直ると、アクセルを踏み込み、杖をついた老人をはねた。老人はゲームのキャラクターみたいな軽さで空に吹き飛んでいった。車はぐんぐん加速していく。

「ハルヒトが言うんだから、そうなんでしょうね。ストレスは発散しなくちゃ」

前を走る車を縫うようにして追い抜いていき、一台の車を外から抜いた瞬間、母さんの車は反対車線にはみ出した。対向車——なぜ

か消防車が、フロントガラスの向こうに見えた。
ぼくはボクサーがガードするみたいに関腕を上げた。消防車が真っ赤な壁となって迫ってくる。ゆっくりゆっくり。赤い壁はガラスを割らず、中まで擦り抜けてきて、ぼくの体を飲み込んだ。と思うと強い衝撃を受けて、僕は目を覚ました。

26歳

ずいぶんと昔のことを夢で見ていた気がする。

赤い壁にぶつかったことは憶えている。左腕と背中に衝撃を受けたい。目を覚ますと同じ部位が痛んだ。床の上で寝てしまっていたらしい。身体は捻じれていた。下半身は仰向けなのに、上半身は腰から左に捻じれて横臥していた。それで背中が強ばっていた。左腕が下敷になって痺れていた。リアルペイン。僕は貼り付いた糊を剥がすみたいに捻じれをほどいていった。外からはアブラゼミの声。どうしてアブラゼミばかり鳴いているのだろうと思ったら、ミンミンゼミも聞こえた。

クーラーがつけっぱなしで涼しかったが背中汗ばんでいた。Tシャツを引っ張って空気をに入れて冷やした。

ペットボトルの黒い液体を飲んだ。甘さだけが舌に絡みついた。それは炭酸の抜けたコーラだと思って飲んだが、別の飲み物だったかもしれない。よくわからなかった。

時計は二時十五分だった。デジタル時計で、見たときにちようど二時十六分になった。夜中かと思ったが、カーテンの隙間が白く明るいので昼間らしい。

パソコンのモニターには青いランプが点いている。操作していないから画面は消えているがパソコンは点いている。操作していな

(そうだ、寝る直前までゲームをしていたんだった)

アメリカとドイツのメーカーが共同開発した『Dream in Dreams』というオンラインゲームだ。ドリーム・イン・ドリームス。意味は「夢の中の夢」で、日本ではDIDと呼ばれたりもする。

僕はゲームを再開する前に、眠気覚ましにインスタントコーヒーを飲もうと、リビングキッチンへ下りた。父さんは仕事の時間だから家には誰もいない。

お湯を入れて溶かすだけの顆粒タイプもあったが、フィルターのついた方にした。

個装ビニールを開封すると茶色い香りが漂った。フィルターのミシン目を開いて、カップの上に嵌め込む。フィルターの中にポットからの熱湯を注いで、十秒だけ蒸らしてから一杯になるまで淹れ

ていく。インスタントだから味は顆粒タイプとそれほど変わらないけど、匂いは良い。コーヒーにとって匂いは重要だ。人間の感覚で、もっとも生を実感できるのが嗅覚だ。

ゲームで人を殺しても何とも思わない。しょせんキャラクターだ。いちいち可哀想なんて思ってたなら、こっちが殺られてしまう。嫌ならゲームなんかやらなければいい。

いつか見た交通事故の現場——たしか高校生のときだった、母さんの運転する車で学校に向かっているときだった。助手席で携帯電話をしてたら、車が急停止した。前方で車が渋滞していて、人だかりが出来ていた。母さんは、僕に降りないように言いつけて様子を见に行った。僕は興味もなく彼女とのメールのつづきを打っていた。

すると開けていた窓から、鉄サビくさい血の臭いがぷーんと漂ってきて、ああ、被害者は死んだんだなと思った。ただ大量の血が流れていただけだったかもしれないけど、血のなかに死を嗅ぎとった。

「お年寄りみたい。子どもじゃなくて良かったわ」

戻ってきた母さんが言った。老人でも可哀想なのにと思ったけど、余計なことと言わなかった。

どうして急にこんなことを思い出したのか、自分でもわからないけど、夢で見た赤い壁のせいかもしれない。

Tシャツの襟元から体臭がした。汗と垢を吸って臭っている。そういえば風呂に入ったのは三日前だったか。僕は腕をあげて脇を嗅いだ。一段と臭ったが嫌とは思わなかった。他人の体臭には耐えがたいものがあるけど、自分の臭いはどこか安心する。まだ生きていると実感できるのだ。

（はやく、夢の世界に戻ろう……）

DIIDというゲームは夢を舞台にしているだけあって何でもできる。海外のゲームだから日本とちがって規制も緩い。どんな犯罪行為もできる。結婚や子作りだってできる。現実世界でできることはたいてい何でもできる。現実では倫理的や経済的にできないことでも、DIIDでは叶えられる。それでこそ「夢の世界」といえるのだ。

プレイヤーが初めてプレイするときには、まずは「シヤドウ」と呼ばれるキャラクターを創ることになる。名前を決めて、性別を決めて——最初は男と女しかなかったけど今では五十九種類の性別があつて、ゲーム内で性転換手術もできる——あとは理想の容姿を創り上げていく。

年齢、身長、骨格、体重、肌の色といった全体像を決めてから、顔や手の輪郭といった細部を決めていく。瞳の大きさや色、まつげの長さ、一重二重、耳の形、ほくろの位置、そばかす、傷や火傷の

痕……を福笑いみたいに選んでいく。整形手術やデザイナーナードビートを批判する人でも、ゲームで理想の容姿を創ることに文句を言わない。ちなみに成人である認証を行って別料金を支払えばシヤドウに性器をとりつけて、ゲーム内でセックスをすることもできる。

こんな風に世界中のゲームプレイヤーが、理想のシヤドウを創って、理想の生活をしているのがD I Dの世界だった。

ゲームのリリース当初はただのアクションゲームだった。もう十五年も前になる。シヤドウはあくまで敵と戦うためのキラクターで、他のプレイヤーと協力してバグと呼ばれる巨大昆虫を倒したり、プレイヤー同士で殺し合うバトルロイヤルをして楽しむのが目的だった。この頃のD I Dは闘争本能が剥き出しの原始時代みたいなものだ。僕は小学生で、クラスの友達とよく殺しあっていた。

ゲーム会社はプレイヤーの要望を受けてゲームシステムを作り替えていく。進化していくんだ。

まずはプレイヤー同士の組織ができた。協力して戦った方がゲームを有利に進められるからだ。それが村や国になっていく。武器やアイテムの商売をするプレイヤーが現れる。選挙でリーダーを決める。現実社会では投票に行かない若者でも、D I Dでリーダーを決める選挙にはルールを守って投票する。君主制の国もあれば、民主制の国もある。

ここまでだったら人気があるだけのオンラインゲームだった。D I Dのすごいところはプレイヤーの要望をすべて実現するところだ。会社には、それでこそ「夢の世界」であるという自負があった。人類の要望をすべて叶えてくれる神だった。そうしてD I Dは人類の潜在的な欲望を体現する世界になっていった。

D I Dを決定的に方向付けたのは「地球再現プロジェクト」だった。それまでもニューヨークやパリや東京のような主要都市はゲーム内に再現されていたけれど、プレイヤーは全世界において、自分の都市も再現して欲しいという要望が相次いだ。

その作業量は膨大で、手には負えないと感じた会社は、システムを創り替える権利をプレイヤーに売ることにした。神が死んだ瞬間だった。権利を買ったプログラマーたちは、自分たちでD I Dの世界を創り換えることができるようになった。不正を働く人もでたけど、同じぐらい不正をとりしめる人もいて、バランスはとれていった。夢の世界を守りたいという動機は、罰則を設けたルールよりも強かった。

プレイヤーたちは理想の暮らしを求めて山を切り開き、海を埋め立て、開発の手を拡げていった。現実の地球とちがうのは、ゲーム

の中には限界がないことだった。新しいサーバーを用意してデータ容量を増やせば、無限の開発ができる。欲望をどこまでも拡げていくことができるのだ。

DI Dに「第二の地球」が完成すると、それまでとはちがうプレイヤーが参入するようになった。アクションゲームをするためではなく、第二の地球でのセカンドライフを楽しむだけにゲームを始める人が増えたのだ。

たとえば、おしゃべりをするためだけにゲームをする。SNSやトークアプリの替わりにDI Dで話すのだ。趣味の集まりやコンパに使われ、ゲーム内で知り合った者同士が現実で結婚するということもある――DI Dに限らずあったことだけどプレイヤーが多いDI Dの方が出会える確率も高い。あるいは世界旅行を楽しむ人もいる。世界遺産や観光名所が再現されているので、お金のかからない小旅行ができる。素晴らしいコンピュータグラフィックの世界を体験することは、油絵で描かれた芸術品を鑑賞するのとかわらない感動がある。

“ゲームをする”のと“夢を見る”のは旅という点で同じだ。現実では味わえない世界を一時的に体験して帰ってくる。ちゃんと帰ってくればいいけど、旅の時間が長すぎると、どっちが現実かわからなくなることもある。長い旅行をしたあと、家に帰ってくると、そこが自分の家でないような気がするところがあるだろう？

僕は高校生のときに経験したことがある。七日間、海沿いの施設に寝泊まりして、毎日泳がされるという強制参加の学校行事があった。行く前は嫌でしょうがなかったけど四日目を過ぎたあたりから、その生活に慣れてきて、後半になると終わるのが寂しいとすら感じるようになる。感極まって泣いてしまっている生徒もいた。僕はそこまでではなかったけど、それでも帰ってきてベッドに横になると、自分の家じゃないような気がして落ち着かなかった。耳の奥で波の音が聞こえる。自分の居場所はここじゃないという気がしてくる。

DI Dのコアなユーザーは――僕もそうだけど、二十四時間ゲームに繋がっぱなしにしている。現実世界ではご飯とトイレと、ときどきお風呂に入る以外は、ずっとDI Dにいる。肉体はこっちにいいけど、意識はずっと向こうにいる。生命維持装置に繋がれたまま眠っている人は夢を見ているのだろうか。見ているとしたら、その人にとっての人生は病室のベッドじゃなくて、やっぱり夢の中なんじゃないかな。

そんなことを考えながらプレイしていたら、不意をつかれて殺されてしまった。僕は他のプレイヤーと殺し合うバトルイタルをして

いた。軍艦島みたいな廃墟ステージで、三〇人が一齐に降りたって殺し合う。物陰に隠れて、敵を待っていたけど、背後から近づく別のシャドウに気がつかなかった。即死だった。

殺されたプレイヤーは自分の「マイルーム」に戻される。そこは許可なく他のプレイヤーが入ることのできない場所で、D I Dで唯一のプライベートな空間だ。僕はこのマイルームを、現実世界の部屋と同じレイアウトにしている。D I D内ではテレビや家具といった装飾アイテムがたくさん売られていて、現実の部屋とそっくりのアイテムを手に入れて、ゲームの中に再現したんだ。画面の中にも、僕の部屋があるようなかんじもするし、あるいは現実のこの部屋に取りつけられた監視カメラの映像を見ているような気分にもなる。現実にいるのか、夢の世界にいるのか、わからなくなってくる。物音がした。何かが崩れるような音。隣の部屋——母さんの寝室からだ。

（ゲームの音か？ それとも現実か？）

わからなかった。

（けれど見に行かなくてはならない）

僕は廊下に出た。手にはライフル銃を握っている。M 1 6 自動小銃。アメリカ軍が採用している標準的な銃だ。安全装置を外して、黒光りする銃身を握りしめる。

（あれ？ ゲームの中でこんな重みがあったっけ？）

母さんの寝室の扉を前蹴りで開けた。アクション映画のヒーローがするみたいに。

中から青白い顔をしたゾンビが襲いかかってきた。頭部を撃ち抜く。ゾンビは倒れる。

D I Dのバグの一種だ。マイルームには他のプレイヤーやバグは入れないのに、いたずらでこういうバグを創って侵入させる奴がいる。

（そうだ、ここはゲームの中だ……）

僕は寝室に入り、しゃがみこんで人を食っている三匹のゾンビ達を順番に撃っていった。

ゾンビに喰われていた人間が起き上がる——よくある描写、ここはやっぱりゲームだ。喰われていた人間は母さんだった。ほら、よくあるストーリー。衝撃の展開ってやつだ。

「バクは夢を食べるのよ……」

（バクじゃなくてバグだよ、母さん）

這い寄ってくる母さんの頭部を狙って、引き金をひいた。

「タ……」

母さんは何か言おうとしたが伝えきる前に力尽きた。
 (僕が殺したわけじゃない……)
 鼻の奥が詰まったかんじがして、通すようにして吸うと、どこから卵が腐ったような臭いがした。ゾンビの臭いだ。

57歳

「先生、ゾンビレースって知ってますか？」

クライアントのマリアはバッグを置いてソファに腰掛けると、開口一番そう言った。

「ゾンビレースですか？」

私はアニメかゲームだろうかと予想したが、マリア本人に語らせようと、訊き返すだけに留めた。

「DIDで週末に開かれる自殺イベントです。先週、それに参加してきたんです」

一気呵成に語る癖のあるマリアの間隙をついて、質問を投げかけた。

「DIDというのから教えてくれますか？」

「先生、知らないんですか？ ドリーム・イン・ドリームス」

「その名前は聞いたことあるな。ニュースなんかでも出ているからね。頭文字をとってDIDなんだね。でも、やったことはない」

マリアのカウンセリングは三回目だったが、境界性パーソナリティ障害の可能性が高いので注意して言葉を選んで話すようにしている。

「うんっと、DIDっていうのはですね——」

二十三歳のマリアは、会話を遠回りさせられてもどかしそうだったが、二回り年上の私にもわかるようにオンラインゲームのしくみを懇切丁寧に説明してくれた。

ゲーム内のキャラクターを「シャドウ」と呼ぶのはユング的で面白いと感じたが、そのシャドウにはライフという体力数値があつて、数値が0になると死ぬ——といってもマイルームという部屋に戻されるだけだそうだが——そのゲーム内で自殺を試みるのを「ゾンビレース」と呼ぶらしかった。なぜ、そう呼ぶかは、これから説明されるのだろう。

「ライフは10000で固定なんです。装備アイテムで増やすことはできませんけど、まあ、わたしみたいにバトルをしないプレイヤーにはあまり関係ないんです。うんっと、たとえばお腹が空くとライフが減ります。一日で500ぐらいですけどね。でも、何か食べれば回復します。マラソンみたいに一日走りまわっても減るのはせいぜい

800ぐらい。一日寝れば5000は回復しますから、つまり日常生活ではほとんど死なないんです」

「うんうん、簡単には死なないんだね」

「バトルに参加すれば別ですよ。頭を撃たれたら即死ですし、内臓なんかだと8000ぐらい減りますから」

「DIDというのは戦うゲームなんですか？」

「んー、ちがうけど、いや、最初はそうなんですけど、そこはいいんです。先生が自分で調べてください」

「わかりました。興味が湧いたら調べてみます」

「それでね、ハイウェイを走っている自動車にぶつかるとか、線路に飛び下りて快速電車に轢かれたりすると即死するんですよ。1500とか喰らいますからね。でも、それってただの自殺じゃないですか。自殺したいならゲームじゃなくて——」

彼女の視線が、私の背後に向けられた。私は視線を追ってわざと大袈裟に振り向いた。部屋の間には花瓶が置いてあって、週ごとに花を替えるようにしていた。それに気がつくかどうかは治療のヒントになることがあるからだ。今日は薄ピンクのダリアが生けてあって、マリアはそれを確かに気がついたのだが、そのことには触れずに、ゲームの話にもどった。

「自殺するならゲームじゃなくて現実で死ねよって話ですよ」

「ゲームとはいえ死んでしまうのは大変なことのように思えますけど」

「ぜんっぜん。それは、くだらない、お遊びです。うん、ゾンビレースに比べたらお遊びですよ」

「どう違うんですか？」

「ゾンビレースは儀式なんです。通過儀礼なんです」

「ほう、通過儀礼ですか。それは興味深いですね」

「まず、レースに参加するには自分とそっくりのシャドウを創らなければいけません。理想の自分じゃなくて、現実そっくりの自分を創るんです。これは参加のルールです」

「なるほど。通過儀礼には古い自分を殺すという意味がありますね」
「それからビルに登るんです。さつき、ライフは10000って言いましたよね？ だいたいビルの二階から落下すると2000ぐらい減るんです。階が上がるごとに1000ずつ増えていって、だから十階から落ちれば死ぬわけです。だけどね、DIDのダメージには細かい数値設定があるんです。打ちどころによってダメージが変わるんです。頭や背中から落ちると即死でも、足とか手とか、うまく落下するとギリギリと心とか数値が残るんです。骨折するからシャドウが歩

けなくなったり、腕がもげたりするんですけど、ゾンビみたいでゾンビレースって呼ばれるんですけど、ああ、もちろんレースっていうのは度胸を試すチキンレースって言葉からきてるんですよ」「その通過儀礼は死ぬか、よくてゾンビになるしかないってことですか？」

「ちがいますよ、先生。ぜんっぜん、わかってない。ゾンビに生まれ変わるんです」

「ゾンビに生まれ変わる…：それっていいことですか？」

「いいことですよ。ゾンビは不死の象徴です。永遠の命です」

「そうでしょうか？」

「そうですよ！」

「マリアさんもそのゾンビレースを体験してきたんですか？」

「いえ、わたしは観客として参加しただけです。先週は十一人の挑戦者がいて、あ、ちなみにギャンブルの対象にもなってるんですよ。DID内の通貨を賭けて、誰が生き残るか賭けるっていう。それで、わたし、お金は賭けなかったけど、この人が助かったらいいなって思って、内心で賭けていた子がいたんです。わたしと同じぐらいの若い子で、ほら、シャドウは本人と同じ容姿にしくちやいけななんですよ。その子、生き残ったんです！ ライフがーだけ残って。ゾンビみたいに這いつくばって、うん、むしろ赤ちゃんみたいだった。一生懸命に立ち上がるうとしてる赤ちゃんみたいだった。彼女は生まれ変わったんです！ わたし、もう感動しちゃって」

「命の大切さを感じたんですか？」

「はい、命の重さを感じました」

彼女は私の「大切」という言葉を「重さ」と言い換えた。

「人が死ぬってこんな感動的なんだって。お遊びの自殺にはない、ゾンビレースには本気があるんです。それで、わたし、今週、飛び降りることにしたんです！ 飛び降りてみて、生き残ったら、現実でも本気で生きてみようと思うんです」

「そのゾンビレースで生き残れなかったら」

「自殺します」

私は冷静に、刺激しすぎないような危惧を込めてフィードバックした。

「自殺するんですか？」

「はい、自殺します。もちろん現実で、ですよ」

彼女は笑った。それはこれまで六回の治療で、一度も見たことのない満面の笑顔だった。

「いいかい、君。結局、D I Dは現実のメタ世界なんだ。現実そつくりの世界が画面の中にある。D I Dをプレイしているうちは、僕らの意識は画面の中にいるけれど、D I Dで死ねば現実世界に戻ってくる。新しいシャドウを創って、また生まれ変わることもできる。人生をやり直すことができる。(ああ、あの頃からやり直せたらなあって、一度や二度、誰だって思うことがあるだろ?) D I Dで抑圧されたイドを解放して好き勝手な行動をとる人もいれば、現実世界と同じ倫理観でささやかに楽しむ人もいる。ゲームでもマナーは守るべきだ、と言う人がいる。でもマナーを守らない人は現実にだっている。ゲームの中で殺人や自殺を弄ぶことを憂慮する人がいる。でも現実でも犯罪も自殺も、戦争もなくならない。ある心理学者は、夢の中で死ぬことと、ゲームの中で死ぬことを類比して、死の疑似体験は再生を意味すると語った。希死念慮のある人が、ゲームや夢で死ぬことで現実に戻ったときには新しい自分に生まれ変わる、と。それを言うなら睡眠だって小さな死だろ。死ぬことを永眠って言ったりするじゃないか。死ぬことと眠ることは似ている。(ベッドで眠りにつくとき、明日、このまま目を覚まさなかつたらどうしようって怖くなつたことないかい?) 僕は、嫌なことがあるとすぐ眠くなる。もう死んでしまいたいと思つたことなんて、何度もある。『こんなこともできないなら死んでしまいなさい』と、母さんに言われたこともある。そんなとき僕は眠つた。『D I Dは集合的無意識の具現化である』僕は、この言葉が好きなんだ。これはD I Dの制作者の一人アイザック・フォークナーの言葉だ。彼はユングに傾倒していた。ゲームの世界観を夢に設定したこともユングが夢に強い関心を抱いていたからだ。僕はいま、君と分かり合うために話している。(君が誰なのか、ようやくわかつたんだ)。君は精神科医なんて仕事をしながら、「こころ」のことが、まるでわかっちゃいなんだ。『夢を見たことがない』なんて平気で言っちゃうだもんね。それで精神科医が勤まるなんて、僕からしたら馬鹿げてるよ。君は家から出ない僕を現実逃避していると思うかもしれないけど、夢を見ない君の方こそ逃避している。夢を見ないということは大切なことから目を背けることなんだ。現実というより真実から逃げている。真実逃避だ。夢にこそ真実があるんだ。無意識に敗北を認めて向き合わなくちゃ。君は、まさか自分が自分だと思ってるんじゃないだろうね? 昨日の自分と明日の自分が同じだつて思い込んでるんじゃないだろうね? よくもまあ、自分のことをそんなに信用できるもんだよ。ある意味、羨ましいよ。でも、本質はこつちにある。それ

は疑いようもない事実で、君がとぼけたことを吐かせば吐かすほど、周りの人間にしわ寄せがくる。スポーツで考えてみて。チームに下手なやつが一人いるだけで、そのつのミスをかバーするために周りが頑張るしかないだろ。家族だってチームみたいなものだ。君が真実逃避しているから、僕はあの魔女に苦しめられてきた。助けを求めても、君は黙ったままの人形。それでも共存していくしかないんだね。地球という小さな球の上で、欲望を抱えた八十億人の人間たちがぎゅうぎゅうと満員電車みたいに肩を押し合い、押し合い、じつと堪えて生きていくしかない。そうだ、地球だよ。無意識には「第二の地球」がある。いいかい、僕も君も日本という国の上で暮らしているよな。日本は島国だけど、島っていうのは海の上に浮かぶ。浮かんでるわけじゃない。海の底では大陸として繋がっている。アジアもアメリカもアフリカもヨーロッパもオーストラリアも大陸はぜんぶ地球のプレートで、海っていう莫大な水に沈んで、先っぽの方だけ、ちょこんと頭を出してるだけだ。この先っぽがあんたが自分だと思ってる世界だよ。頭で考えることなんて、これっぽっちだよ。無意識は海の中に広がっている。それも陸地の何万倍も広い。無意識こそが人間の本質だって、認める気になったかい？ 深い海の底、太陽の光りさえ届かないような暗闇に無意識があって、そこに人間の本质があるんだ。大陸は一人の人間でもある。君と僕は他人だ。現実世界の肉体という基準でみれば、たしかにそうだ。海の上だけみれば、そう見えるんだ。それぞれの骨と肉をもっていて、頭蓋のなかにある脳で考えて行動している。セックスして繋がったように見えても、肉体的に繋がることはできない。繋がれるのは臍帯につながれた母子だけだ。でも、海に潜ればみんな繋がっているんだよ。肉体では繋がれなくとも、意識は繋がっている。君は僕で、僕は君。一人は人類で、人類は一人の中にある。母さんを殺したのには僕であり、君でもある。ねえ、わかったかい？ 父さん」

57歳

電車が急停止したらしく、全身が右方向に引っ張られて、それを目を覚ました。座っていたのが端の席だったので、仕切り板に押し付けられて、左隣にいたOLが抱きつくように被さってきた。私の膝の上に彼女の頭が乗った。

OLは頭だけ振り返って「すみません」と言った。顔が近かった。化粧が少なく、申しわけ程度につつじ色の口紅をさしているだけの落ちついた美人だった。襟元から、ふわりと金木犀の香りがした。

「いいえ。大丈夫ですか？」

「大丈夫です。わたしは——」

彼女もまた左隣にいた老婆に乗っかられていて、すぐに起き上がれないようだった。老婆の左は空席だった。

老婆はゆっくりと這い上がるようにして彼女から剥がれてから、彼女に謝った。彼女は気さくに微笑み返してから、私の太腿に掌を置いた。体勢を起こそうと無意識にしたことだが、すぐに初老の男とはいえ異性の脚に触れてしまったと自覚して「すみません」と言っ、手を突き直した。突き直した手は私の膝の間に置かれ、彼女の腕の骨が私の内腿に触れた。

「すみません」と、彼女はもう一度言った。

車内に立っている人はなく、座席にもぼつぼつと空きがあった。駅に着くたびに降りる人がいて歯が抜けるように空席ができ、乗ってきた人が各々に隙間に収まったりしていたが、新宿から遠ざかるに従って空白が目立つようになるのは、いつものことだった。

何か夢を見ていたような気がした。誰かに一方的に喚かれたような、耳がじんとする感覚だけが残っていた。クライアントの誰かだろうか。思い出せなかった。

運転手の放送が始まり、話していた人々が口を噤んだ。

「お客様にお知らせいたします。前方に障害物を確認したため緊急停車しました。ただいま状況ならびに安全の確認を行っております。いましばらくお待ち下さい」

それを聞いて、反対の座席に座っていた二人組の若者の、キャップを被っている方が言った。

「ゾンビレースじゃね？」

「なら電車動かねえぞ。死ぬのは勝手だけど周りの迷惑考えろよな」と言っ腕時計を見た。大学生だろうか、ギターかベースか楽器を抱えている。＃ゾンビレース” という言葉をどこかで聞いたことがある、と思い出そうとしていたが一向に出てこなかった。

「見に行こうぜ？」

キャップが先頭車両の方に親指を向けた。

「見ねえよ。キモいし。つつうか、先週も見たし」

「動画撮ってグループに流そうぜ」

「やめとけって」

「いいから、付きあえって。ビビってんの？」

キャップは立ち上がって、もう一人を促す。

「しょうがねえな」

舌打ちしながら、しぶしぶ楽器ケースを抱えあげ、二人は連結部

を通って先頭車両へかけていった。

「キモチワル……」

隣のOLがつぶやいた。さつき私や老婆に対したときのトーンとまるで違った低い声だったので驚いた。彼女は、私の視線を感じてこちらを向いた。失言を詫びるように頭を下げた。

「あの、ゾンビレースって何ですか？ あの子たちが言ってましたよね。どこかで聞いたことがある気がするんですが……」

「ただの趣味の悪いゲームですよ」

彼女が詳細な説明を加えてくれるかと待っていたが、それきり何も言わないので会話は終わった。

車窓からは黒い川が見えた。電車は鉄橋のど真ん中にいるらしかった。黒い粘着質な、泥のような水面が畝りながら揺れていて、薄気味悪かった。

（川は海につながっている）

わたしは彼女の方を見た。彼女の声とは違ったが、そちらから話しかけられたような気がしたのだ。

彼女は私の視線には気付かず、あるいは無視してか、スマートフォンでメッセージを送っていた。ちらりと見えた画面には、吹き出しの会話とウサギのキャラクターが見えた。家族か恋人に今の状況を知らせているのだろう。メッセージは読めなかったが、ウサギのスタンプは大袈裟に泣いていて、彼女の今の心情を代弁していた。

私も妻に電話をしようかと考えたが、それを遮るように、また声がした。

（川を流れる水はやがて海に辿り着く。君、わかるかい？）

老婆は手を組んで、寝ているのか、地蔵のようにおとなしく座っていた。声の主は老婆でもなさそうだった。他に、車内で話しかけた様子の人物は見当たらなかった。

私は立ち上がって、ドアの手摺りを掴んだ。

そうだ、"ゾンビレース" というのは、あのクライアントが言っていたんだ。もしかして彼女が線路に飛び込んだのか？

バンツと窓を叩く音とともに、ドアの窓ガラスに動物がへばりついた。鳥がぶつかっただのかと思っただが、白い腹をぺたりとつけ、両手両足を大の字に伸ばしたそれはカエルらしかった。前脚の四本の指、後脚の五本指の広げ方がいかにもカエルだった。

（父さん、こつちに来て）

「ハルヒトなのか？」

（いつまでも丘にいないで泳ごう。水の中で。海の中で。話をしようよ）

カエルが窓ガラスから離れて、暗い川に落ちていった。沈む音はしなかった。

息子がカエルなん、馬鹿馬鹿しい、疲れているのかもしれない、と思った。唐突に眠気に襲われた。私は座席に戻って、腕を組んで目を瞑った。

意識が遠のいていく。

「大丈夫ですか？」と隣のOLの声がする。海に飛び込んでいく蛙が、息子のようにも、あのクライアントのようにも、また別の誰かのようにも感じられた。

ぽちゃん、と寂しい音がした。

目を覚ますと車内にいた。

隣にいたOLも老婆もいなかった。狐か狸に化かされでもしたようだった。いや、カエルに化かされたのかもしれない。いやいや、ただ夢を見ていたのだ。

夢なんて見たのは何年振りだろうか。夢なんか一度も見たことがないと思っていたが、こうして見てみると子供の頃には何度も見ていた気がした。頭の中に冷気が通ったように醒めていた。

発車のベルが鳴る。

電車は駅に到着していた。降りる駅だった。私は膝の上の鞆を抱えて、車輛ドアが閉まる寸前でホームに出た。

改札を抜け、信号を二つ渡って路地へ入ると、途端に人が減って暗くなる。住宅地で新旧の一軒家が並んでいる。古いアパートはあるがマンションは駅前にしかない。

古い造りの家にはコンクリート塀があったり、商店だった頃の名残で文字の消えかかった看板がついたままになっているような家がある。駐車場がある家にはシャッターがついている。新しく建てられた家は造りがちがう。シャッターがなくて一階が駐車スペースになっている車がない家には、自転車や植木鉢が並んでいる。犬小屋がある家もある。

まだ新築だった我が家を買ったのは、ハルヒトが高校に入るタイミングだった。あれから十年になる。

あの頃の妻には、まだ――神経質な性格は元来のものだが、まだ他人と話す余地があった。他人の話を聞く余地があった。事故を起こしてからだ。毎朝、息子を高校まで送っていた妻が交通事故を起こした。それきり、うちの駐車場には車がなくなった。息子が学校へ行かなくなつて、部屋に籠もってゲームばかりするようになったのも、その頃からだ。私が山に登るようになったのも、その頃からだ。

泊まりがけで登るような高い山ではない。日帰りで行けるようなところへ電車で行って、一日かけて登って、下りて、また電車に乗って帰ってくる。折々に季節の花を見かければ嬉しくもなるが、景色を楽しむというよりは登って下りてくるのが目的だった。

それも年に一度や二度、他人からしたら趣味というほどでもないのだが、ときどき「行かなくてはならない」という気になるのだ。足を使って一歩一歩登っていくことで、何かを確かめたくなるのだ。路に迷わずに頂上まで登って、下りてくることで、私はこれでいいのだと実感する。

海は見ているだけでいい。山の方が好きだ。そもそも泳ぎが得意でないのもあるが、波打ち際に足を入れたとき、引いていく波に足を掬われるかんじが嫌い。恐怖にも近い。憶えていないが小さい頃のトラウマがあるのかもしれない。

家は丘の上にあって、朝は坂道を下って駅へ向かい、帰るときには登ることになる。この登り坂を前にして「行かなくはならない」と、私は思う。

家に着いて玄関を開けると、二階から物音が聞こえた。ドシンという階段を踏み外したような音だった。息子だろうか。別段、気には留めなかった。

いつものことだが、妻も息子もクローラーを点けばなしにするので、家の中は涼しかった。皮靴を脱ぐと、足先に冷気が触れて心地よかった。フローリングもひんやりして気持ちいい。汗の足跡を残しながら、階段を登っていった。

二階は短い廊下があって、手前が息子の部屋で、奥が夫婦の寝室になっている。

息子の部屋のドアが開きっぱなしになっていた。パソコンモニターが点いていて、ゲームの途中らしかった。風呂かトイレか冷蔵庫だろう。それ以外ではほとんど出てこない。

私は寝室まで行って固まった。内開きのドアが閉まりきつていなかった。数センチほどの隙間の中から人の気配がした。それはもう直観という言葉でしか説明しようのない感覚であったが、中にいるのは息子であるとわかった。息子が寝室にいるということが、ただならぬ自体であると感じられた。

ドアノブに手をかけ、ゆっくりと押し開けていく。

息子の横姿が視界に入った。息子は、私の位置からはまだ死角になっっている部屋の奥を見ていて――わずかに見上げていて、目は見開き、口は言葉を失ったように半開きになっている。開ききったドアがストップパーに当たって、その音で、息子がこちらを向いた。

中に入って、息子が見ていた方を向くと、妻が首を吊っていた。嫁入り道具だった桐箆箭の取っ手に結わえた紐が、側面をつたって出っ張りを介して箆箭の上から下りてきて妻の首に巻き付いていて、妻の体を床から二〇センチほど浮かせていた。首を締め付けた紐は、バルコニーに布団やシーツを干すときに風で飛ばないように括りつけるときに縛っている紐だった。妻が余った布地をパッチワークのように縫い合わせてつくった紐で、そんなもので人間を吊せるものかと思うが、現に、今、目の前で、切れることなく妻の体を見事に吊り上げていた。足元には積み重なった本が崩れていた。息子の英才教育のために読み漁っていた子育てや精神医学の類だ。一番上の白い表紙の本の上に黄色い水溜りができていた。漏れた小便だろう。妻の体が少しだけ揺れているように見えたが、私の足が震えていただけだった。死んでからしばらく経っているようだ。

妻の顔をまじまじと見たのはずいぶんと久しぶりだった。こんな顔だったろうか。頸部を締め上げられて浮腫んでいるせいか、妻に似せて造られた人形のようなだった。紐を切られた操り人形のようなだった。人形劇は終わったのだ、と安堵する気持ちがあった。しかし、妻の正体は人形遣いの方で、まだそこにおいて、私や息子を操ろうとしているような恐ろしさがあった。

「魔女は死んでいない……」

息子が呟いた。その視線はぶら下がった母の目に向けられていた。閉じきっていない瞳が、動きだして、今にもこちらを睨んできそうだった。

私は息子の横顔を見ながら、しばらく見ないうちにまた少し肥つたようだと、なぜか、そんなどうでもいいようなことを考えた。息子の足元には、ポールハンガーが倒れていて、妻のバッグや帽子が散らばっていた。ツリー状のハンガーで、葉のない枝の部分にバッグやら帽子やらを引っ掛けられるようになっていたものだ。私が玄関を開けたときに聞こえた物音は、これが倒れた音だったのだろう。

17歳

D I D に MARIA というプレイヤーがいた。

彼女のシャドウは全身パールのボディスーツを着ていて、ハリウッド映画に出てくる女スパイといった出で立ちで、いつも短銃を身につけていた。MARIAは「第二の地球」が完成した後始めたプレイヤーで、戦闘ではなく生活を楽しむのが目的だった。そういうプレイスタイルの人は武器を持ち歩かないことが多い。手ブラの人がほとんどだけど、本とか箆とかフライパンとか、武器と呼んでい

いのかわからないようなものを装飾品として装備していることも多い。けど MARIA は短銃を持ち歩いてた。それはボディスーツに合わせたコーデイナートの一つに過ぎなかったのかもしれないが、育った環境で培われた防衛本能がゲームの中にも投影されていたのかもしれない。

彼女は南アジアの国に住む十七歳の少女だった。男尊女卑の因習が根強く残る国で、初潮がくれば三十歳も年上の顔も知らない男と結婚をさせられたり、レイプされても夜に出歩く女が悪いという判決が出たりするような国だった。彼女の生まれは悪くなかったが、その国の女として産まれたことが意識下の膿となって残っていた。だから短銃を持ち歩くことは護身用の意味合いがあったのだろう。ただし、その武器は戦闘をするとなれば脆弱なシロモノだった。女性蔑視な国に住む彼女からしたら、ゾンビや宇宙人と肉弾戦をくり広げるハリウッド映画のヒロインは憧れだったにちがいない。それが彼女のシャドウには投影されていたのだろう。

とはいえ、彼女の目的はあくまで世界旅行だった。

「第二の地球」は CG とはいえ世界中のあらゆる国が再現されているので、その街並みを歩くだけでも世界旅行気分が味わえる。世界遺産めぐりをするプレイヤーも多い。彼女は旅行先でのお土産アイテムを買い集めるのが趣味だった。

ある日、MARIA は旅先で男性プレイヤーと出会った。外見は中世ヨーロッパ風の鎧をまとった騎士のようなシャドウだった。彼女はゲーム内のキャラクターに恋愛感情を抱くようなタイプではなかったし、ロマンスも期待していなかったが、同じ趣味をもつ相手との会話を楽しみ、何度か一緒に旅をするうちに親しみを抱くようになってた。それまで一人旅ばかりしていた MARIA は、誰かと記憶を共有する喜びを知った。

男は彼女を南アメリカのアマゾンの奥地へ誘った。そこは「戦闘区域」だった。プレイヤー同士の殺し合いを楽しむバトルロイヤルをするための場所だった。DID では従来のアクションゲームだった頃からの戦闘を楽しむプレイヤーのための「戦闘区域」と、後から入ってきた旅行や DID 内での生活だけを楽しむ人のための「非戦闘区域」とに分かれていた。「非戦闘区域」では、そもそも武器が使用できない設定になっている。「戦闘区域」に入ろうとすると、攻撃を受けたり殺されたりすることがあるという警告が出て、承諾をしなければ入れないようになってる。旅行を楽しむプレイヤーは、そういった危険な場所には近寄らないのだ。だから MARIA が、その男に誘導されたとはいえ、アマゾンの奥地へ入ったことは彼女自身

が承諾をしたということではあった。

「戦闘区域」に入ると一定時間はエリアから抜け出すことができない。これはバトルロイヤルの殺し合いという性質上、危なくなつたからとエリアから「マイルーム」に逃げ出すような行為を防止するためのルールである。

「裏を返せば一定時間経てば、無事に帰ってこれるってことさ」

白銀の騎士が MARIA に言った。それは観光よりも刺激的な「冒険」なのだと言った。

アマゾンの奥地には、戦闘を盛り上げるための、ゲームオリジナルの空想の舞台が用意されていた。古代遺跡があり、洞窟の奥まで行けば「ドクロの金貨」というアイテムが入手できるようになっていた。白銀の騎士は訪れたことがあり、彼はその金貨を持っていた。そのアイテムには何の効果もなく、使い道もないものだったが、それを持っているということは、アマゾンの奥地に辿りついた証であった。

MARIA は、すでに世界遺産はすべて踏破していて、行きたいと思っていた観光地もあらかた訪れていた。新しいコレクションアイテムとして、その金貨が欲しいと思ったし、なにより男の危険な誘いにワクワクもしていた。危険であるからこそその魅力があった。火遊びをしたい年頃でもあった。死んだところで、しよせんゲームである。シャドウは「マイルーム」に戻されるだけのことである。

彼女は男とアマゾンの密林へと踏み込んだ。

「危ないときは僕が守るよ」

と、白銀の騎士は言った。彼女も何かあれば短銃で応戦する覚悟だった。

「川に入ると戦闘プレイヤーに狙い撃ちされるから、森の中を行こう」

騎士のガイドに従って森のへ入って行くと、そこに二人のシャドウが待ち構えていた。山賊風の男とオオカミ男だった。二対二。

MARIA は短銃を構えた。

すると前に立っていた白銀の騎士は振り返って、持っていた剣で MARIA を切りつけた。操作ミスで狙いが外れたわけではない。騎士は何度も何度も連続的に切りつけてくる。待ち構えていた連中と騎士はグルだったのだ。

彼女はショックを受けた。しよせんゲーム、であるが、信用していた相手にとつぜん裏切られるという行為に体が震えた。

「Buy your pussy」

オオカミ男が言った。D I D では別料金を支払うことでシャドウ

に性器をとりつけることができ、ゲーム内でセックスをすることができる。どうして、ゲームにそんな機能が必要なのかという疑問の声もあるけど、D I Dはもう一つの現実になりつつある。その仮想世界で結婚する人もいれば、子どもを作る人もいる。一部の性的マインリテイの人の楽しみ方もあった。つまりは、多くの人の願望の結果としてある機能だった。

MARIAはどうして従ってしまったのか、わからないままにクレジットカードを使って、自分のシヤドウに女性器を取りつけた。そして男達の言うまま性行為をした。はじめにオオカミ男が弄び、つぎに山賊が愉しみ、最後に白銀の騎士が犯した。

しよせんゲームだ、と彼女は考えた。

卑猥な言葉を浴びせながら、CGの女スパイを犯している男達を見ながら、粗悪なポルノ映画を見ているような気がした。けれど理想を体現したシヤドウが犯されるのは悔しかった。クレジットカードまで使って、男達を愉しませていることが惨めに感じられた。一〇〇ドルほどの金額だが、クレジットカードの明細を見た親に問い質される恐怖もあった。

モニター画面を消すだけで、その世界との繋がりを切ることはできた。コントローラーを置いて、凝った首と肩をほぐして紅茶でも淹れればいい。シナモンとカルダモンが薫るマサラチャイでも入れて、悪い夢でも見たと忘れてしまえばいいことだった。

しかし、彼女は画面から目を離せなかった。男達は気が済むと消えていった。甲高い鳥の鳴き声が響くアマゾンの森で、MARIAのシヤドウだけが呆然と立ち尽くしていた。

彼女は気絶しているとところを家族に見送られて病院に運ばれた。彼女を診察した高齢の精神科医は、たかがゲームでそんな症状を引き起こすということを理解できず、特殊な事例として処理した。

18歳

目を覚ますと、ぼくは病室にいた。壁際のベッドに寝ている。

天井の模様に見覚えがある。くすんだホワイトにぶつぶつと黒い斑点。長い蛍光灯が平行に二本。外からは子どもの声がする。言葉は聞き取れないが、何重にも声が重なってワアワアと騒いでいる。学校の休み時間だ。

ここが夢の中なのはすぐにわかった。三つの根拠がある。

ひとつめは、ぼくが夢の中だと自覚していること。前に話した、ひとつめの根拠は目覚めた記憶がないことだった。それと意味は同じだ。だけど、前は自覚すらなかった。

魚は海を泳いでいるという自覚がないだろ。釣り上げられて、初めて海という安全な世界に生きていたことを知るんだ。死にかけてようやく魚は海を知る。帰りたいと、もがく。

無事に戻れたとしても魚は孤独だ。海から出たことのない魚たちは海を知らない。あいつは死にかけて頭がおかしくなってしまったんだ、と誰も魚の言葉には耳を傾けない。居場所をなくした魚は再び海から跳び出そうとする。それは新しい世界への旅立ちかもしれないが、自殺行為かもしれない。いずれにせよ跳ぶには決断がいる。

ここが夢の中であるという、ふたつめの根拠は死んだ人間がいること。ぼくが死んだのではなければ、だけど。

カーテンに遮られているが、隣にもう一つのベッドがあつて、嗅ぎ覚えのある消毒液の匂いがした。手を消毒するような薄いアルコールではなくて、綿棒につけて塗る赤茶けたヨードチンキの匂いだ。ここは保健室だ。

カーテンの向こうにデスクが見えた。白衣を着た女性が座ってる。(先生だ！)

ぼくの驚きに呼応するかのように先生は立ち上がって、こちらにやってきた。

(やっぱり先生だ。マリア先生だ！)

先生のあたたかい春の野原のような匂いと、天使のような声が降ってきた。

「目が覚めたみたいね。ハルヒトくん」

「はい、半分ぐらいは。まだ夢の中にいるけど、ここが夢だとわかるぐらいには醒めました」

ぼくは起きようとしたがだめだった。手も足も腰も力を入れた感覚はあるのに体が重くて上がらない。

「起きなくていいのよ。その体じゃ動けるはずないわ。あんな事故に遭ったんですもの。命が助かっただけでも奇跡よ」

首から下にはブランケットが掛けられていて、自分の身体が見えなかった

「事故？　ぼくは事故にあつたんですか？」

「覚えていないのね。お母様の運転する車に乗っているときに、対向車と正面衝突したのよ。御母様は亡くなつたわ」

「母が？　まさか、そんなはずはありません。何かの間違いでしょう？　あの人は死にません。先生、間違いだって言ってください！」

「落ちついて、ハルヒトくん」

先生の手がぼくの頭を撫でた。細くて骨ばった指だった。ひんやりして気持ちよかった。

「マリア先生、本当に母さんは死んだんですか？」

「ええ……即死だったわ」

「自殺じゃないんですか？」

「いいえ、あれは事故なのよ」

「自殺にみえる事故ってことはないですか？ たとえば自らアクセ

ルを踏み込んだとしたら、それは自殺のようなものじゃないですか」

「アクセルを踏ませたものがあるのよ。お母様に取り憑いてアクセ

ルを踏ませた亡霊がいるのよ」

「でも母さんは死なないんです」

「ハルヒトくん、気持ちはわかるわ」

「母さんは死なないんです」

「……そうね。そうかもしれないわね」

そう思いたいならそれでもいい、と言うかわりに先生はポンポンと叩いた。

「先生、ひとつ質問があるんですが……」

「なに？」

「僕、事故に遭う前に誰かとメールをしていたんです。スマホを使
って。もしかして、その相手は先生じゃないですか？ そんな気が
するんです」

「待ってね。いま、確認してみる」

先生はデスクに戻って行って、スマートフォンをチェックした。

先生の顔はカーテンに隠れて見えなかった。そういえば、さつきか
ら一度も先生の顔を見ていない。

「わたしじゃないみたいね。ハルヒトくんからのメールは来てない
わ」

先生はデスクから言った。

「そうですか。それじゃあ、ぼくのスマホはどこにあるんですか？」

「あとで警察に訊いてみるといいわ。あの事故じゃスマホも無事か
わからないけど」

「ぼく、誰かにメッセージを送っていたんです。でも誰にも届いて
ないかもしれませんね。スマホが壊れていたら、もう確かめること
もできない。もう、メールをしていた相手とも二度と会えないんで
すね」

「まだどこかで会えるわよ、生きていれば」

「生きていても二度と会えない人もいますよ」

「でも、あなたが生きていればね。相手が死んでなければ可能性は
ゼロではないでしょ」

とつぜん、悲しいとも思っていないのにぼくの目に涙が溜まって

きた。こぼれ落ちた一滴が目尻から耳に流れると、堰を切ったようにつぎつぎ流れた。

「先生、こっちに来てくれませんか。よくわからないんですが涙が出るんです」

戻ってきた先生から、あのあたたかい匂いがして、ぼくは安心した。

「先生、ぼく、先生のこと好きなんですよ」

「ええ、知ってるわ。わたしもハルヒトくんが好きだから」

「じゃあ、どうしてメールは先生に届いていないんですか？」

「どうしてなのかしら？ でも、わたしには届かなかったのよ」

「ほんとうに先生のこと好きなんです」

ぼくはもう一度言った。

「ええ、わかってる。だけど届かなかったのよ」

「夢の中でも思い通りにならないことがあるんですね……」

「もう、考えなくていいのよ。眠りましょう。ここは夢の中なんだから」

マリア先生はシャツのボタンを外していつて胸元を開いた。手で片方のおっぱいを掬いだして、ぼくの顔に近づけてきた。

「ほら、飲みなさい」

口元に差し込まれた乳首を口に含んだ。唇で挟むと舌の上に甘さが広がった。溶けたバナアイスマイスマイだった。

「もつともつと。好きなだけ飲みなさい」

おっぱいを押しつけられて苦しくなった。先生のおっぱいは指と同じでひんやりと冷たかった。

（先生はもう死んでいいるから、先生の指もおっぱいも、こんなにも冷たいんだ）

このまま眠ってしまったのもいいかもしれない、と思った。そうすれば僕ももう目を覚まさないだろう。

「マリア先生、ぼく、先生の顔が見たい。さつきから先生の後ろ姿や白衣は見えるのに顔だけが見えないんです。手の感触も匂いも感じるのに、顔だけがどうしても見えないんです」

「見ない方がいいのよ。こんな顔」

「どうして？」

「買い物途中で、擦れ違った男の子にゾンビって言われたことがある。わたしの顔を初めて見た人はみんなハッとして目を見開くの。見てはいけないものを見てしまったようにサッと逸らして、けれどもう一度見ずにはいられなくなって見る。見て後悔する。ああ、やつぱりこの世のものとは思えないという恐怖に満ちた顔をする。そ

の顔を見ると、わたしは申し訳ない気持ちになる。ごめんなさい。こんな顔した人間が存在していて、ごめんなさいって」

「ぼくは目を逸らしません。だから見せてください」
 「そう言ってくれる人もいた。自分は人を見た目で判断しない、差別なんかしないっていう目で見えるの。そんな顔なんともないさ、つて引き攣った笑顔でわたしを見つめて……引き攣っているのが自分でもわかるのね。笑顔がますます引き攣っていく。結局、わたしはごめんなさいと思う」

「それでもぼくは見たいんです」
 体をよじって先生の顔を見ようとしたが、先生は背中を向けてしまった。

「ハルヒトくん。あなたは先生よりも自分の心配しなくちゃ。ふふっ、あなたの身体、先生よりずいぶんとひどいもんよ、ふふふっ」
 「このブランケットをとってもらえませんか？」

「もちろんよ。ふふふ」

マリア先生は両手でブランケットを掴むと、お披露目みたいにゆっくりブランケットをめくっていった。

首から下は芋虫になっていた。ウインナーみたいな切れ込みがあつて、力を入れてみるとくねくねと動く。腰に力を入れると真ん中あたりが、足先に力を入れると先っぽの方が少しだけ動く。こんなんだから起きようとしても起きられなかったんだ、と驚くよりもむしろ納得した。

「先生、これからぼくはどうなるんですか？」

「もうすぐ蛹になるの」

「蛹になった後は蝶になれるんですか？」

「運がよければ、ね。蛹のうちに鳥に見つかって食べられてしまうかもしれない。羽根を伸ばしても、乾くまでは動くこともできない。その間に小さな子どもが好奇心で握りつぶすかもしれない」

「だけど、やらなければならぬ、ですよね？」

「どちらでもいいわ。どうせ死ぬんだから」

「けれど、やるよ。やるしかないもん」

「ハルヒトくんは強い子だったのね」

「ぼくが頑張っていれば、ママの」とだって守ってあげられたんだ」

「ふふっ、生きているうちに話せばよかったわね」

マリア先生はまた、ぼくの頭を撫でた。

19歳

あれはユメだったと信じたい。

そうでなければボクは……とんでもないことをしでかしたことになる。

まずレンタカーショップに行った。現実では一度も行ったことがないから、ドラマかCMか、テレビで見たイメージだと思う。ガラス貼りの店内に、受付カウンターがあつて、そこにえんじ色ついでうのかな、赤茶の制服を着た若い男の人がいた。キャップも被っていた。

「いらつしやいませ」

「あの、診察をお願いしたいんですけれど」

ボクはたしかにそう言った。今、思い出してみても、それはおかしな言い方だったけど、そのときは何とも思わなかった。受付のお兄さんは聞こえなかったのか、聞き流したのか、何もなかったように話を進めた。

「車両のタイプはどうしますか？」

「タイプですか」

「ふつうのコンパクトでいいですか？ 軽とか、ミニバンとかもありますけど」

「走るなら何でもいいです。遠くへ行きたいんです。遠くへ行けるなら車でなくてもいいんです。船でも飛行機でも。ゾウやラクダでもいいんです」

「こちらで見繕ってみましょうか」

お兄さんはボクの言葉には興味を持たず、ただ自分の仕事をこなすということに集中している。書類を指差しながら、いくつかの項目にレを入れていった。

「あ、吸われますかね？」

「座れる方がいいです」

「かしこまりました」

喫煙にチェックした。

「だいたい、こんなかんじでいかがですかね」

「はい、それをお願いします」

「じゃあ免許証おねがいします」

「じつはボク、免許を持っていないんですが、構わないでしょうか？」

「これまでに運転のご経験は？」

「あります。ドリーム・イン・ドリームスというゲームではレースに出たこともあります。でも運転免許はもっていないんです」

「わかりました。まあ、いいんじゃないですかね。まさか車を借りて小学生の集団に突っこむわけじゃないですよね？」

「はい。遠くに行かなくてはいけません」

「何かあったときには自己責任でお願いしますね。自分、結婚したばかりなんですよ。もうすぐ子供も産まれます。働かなくちゃいけないんです。あなたがどこへ行こうと、とち狂って人を轢き殺したとしても、自分の家族が被害に遭わなければどうでもいいんです。その代わり、あなたのせいで仕事に影響が出たら断罪します。よろしいですか？」

「はい、それでいいです」

お兄さんは書類に丸い大きなハンコをボンと押した。認可と書かれていた。

それから車に乗るまでのことは覚えていない。というかユメだったから、次の瞬間にはもう乗っていたんだ。そうだよ、これはユメなんだ。

ボクはアフリカのサバンナを走っている。

(ずいぶん遠くに来たなあ)

かなりスピードを出しているが一面、野原でぶつかるとようなものは何もない。のんびりウシの群れが草を食んでいる。あれは乳牛だ。北海道にいるような白黒まだらのホルスタイン。アフリカはおるか北海道にすら行ったことないんだ。だからこのウシだって牛乳のパッケージにあるイラストから連想したに過ぎない。ボクのココロはそんなイミテーションばかりで本物なんて一つもない。だからユメには匂いがない。香りが無い。悪臭がしない。

ねえ、キミはこのむなしさを想像したことあるかい？ 口から出てくる言葉がぜんぶ偽物なんて、ちよつとした詐欺師みたいなものだろ。詐欺師なら、そのでまかせで利益を得るけど、ボクのでまかせはいわば慈善事業、ボランティアだ。ウソだってバレバレだからね。マシンガンみたいにウソをつけばつくほど「ウソをつくくな！」「いいかげんにしろ！」とお叱りを受ける。父さんには理解できないだろうな。ボクみたいなイミテーションな世界に生きてる世代のことだ。

(父さんは山にいる自分が、本当だと思ってるんだろ?)

山のコトバと、町のコトバを使い分けて生きている。田舎くさい山のコトバが嫌で東京に出てきたくせに、東京でバカにされると、本当の自分は山にいて逃げこむんだ。でも標準語しかもたないボクは、その薄っぺらさに気付いても、どこにも逃げられない。自分のコトバがないんだ。だから、ネットかユメかゲームかアニメか、そういったファンタジーのセカイに逃げこむ。カタカナのセカイ。ムナシイだろ？

虚しくも空しくもなくムナシなんだよ。

助手席を見るとライフル銃が置かれている。もちろんM16自動小銃。ボクがDIDでいつも使っている武器だ。ブラックライフルなんて相性もあるけど、黒光りしたボディは男根そのものだと思う。

左手でぶつとい銃身を握って狙いを定め、発射。

ホルスタインの横っ腹に命中。胴をくの字に折って倒れ込む。ほんのりと火薬の匂いが漂う。ああ、仏壇の線香の香りだ。

あいつら、家族が殺られたつてのに助けようもしない。動物は薄情だ。

ウシつてのは脳味噌が人間の三分の一しかないから愛情も三分の一しかないんだろう。ただ食っちゃ寝、食っちゃ寝して、自分が生きることにしか頭を使わない。そういえば子ウシの脳味噌はおいしいらしいね。イヌやネコやイルカを殺すのは可哀想だと言うやつらが子ウシの脳味噌スープをすすってる狂気。ポークソテー、フライドチキン、牛フィレストーキ。刺身も喰う。秋刀魚は秋の味覚。ゴキブリは叩き潰す。シロアリや蜂は巣ごと撲滅する。人間は動物だと言いながら、やつらとは違う。子どもを虐待する親を悪魔のように唾棄する平和な家庭——レンタカーショップのお兄さんみたいな——それだつてイミテーションだつてことは、ボクには見えている。コトバが乱れていく。

ああ、もう、そういうことが言いたいんじゃない。ボクの本当のコトバはどこにある。銃口を啜えて腐った脳にカンツウさせてみようか。貫通。姦通。

そうだ、子どもを狙おう。

ボクは車を徐行してターゲットの集団——子どもじゃない、ホルスタインの群れ——に近づいていく。

あいつら、仲間が殺されたつてのに、もう草を食んでやがる。被災地のニュースをテレビで見ながらステーキを食べる幸せ家族。

母親は殺さない。目の前で子ウシを殺してやるんだ。お前が鳴き叫ぶ顔が見たい。顔が見たいんだ。泣いているのか、怒っているのか。呆れ顔の裏に潜んだ本物が見たいんだ。

トリガーを引く。

子ウシの頭に命中。即死だ。頭をやればゾンビだつて一発なんだ。

母親はどうだ？

叫んでやがる。

悲鳴。間の抜けたモウという鳴き声。でも本物を聞いたことはない。テレビで見たこともない。だからそれは、人間の叫び声になった。ヒステリックなママが目の前で、子どもが殺されたときのヒス

テリックな叫び。真つ赤なマニキュアを塗った尖った爪でガラスを引っ掻いたような叫声。なんだ、ウシにもココロがあるんじゃないか。それならどうして、今まで無関心だった？

気に食わない。

大地に転がった我が子をつついて起こそうとしている母ウシ。狙いを定める。

と、とつぜん、横からボクのオモチヤが取り上げられた。

「ハルヒト、いつまでゲームばっかりしてるんじゃないの」

ライフルを奪ったのは母さんだった。

「返せよ。これは命をかけた大事な闘いなんだ」

「宿題は終わったの？ この前の模試。また下がってたじゃない。

浪人は一年だけの約束でしょ」

「母さん、知ってる？ タンポポはキク科の被子植物で双子葉類の合弁花。おしべは五本。花のように見えるのは頭花といって小さな花が集まったもの。冬越しはロゼット」

「それがどうしたの？」

「裸子植物で覚えておくのはマツ、イチヨウ、スギ。裸子植物は子房がなく、胚珠がむき出しになっている。こんな知識、コトバだけだよ。公園に行ったってハルジオンとヒメジオンを見分けることもできやしない。ネットを使えば画像が出てくる。わかったような気になる。だけど触ったこともなければ、嗅いだこともない。タンポポのこと、覚えてるか？ 幼稚園の植込み。ボクが綿毛を蹴り飛ばしていたら、母さんは汚いからやめなさいって言ったね。綿毛が耳に入ると頭から花が咲いちやうのよってウソをついた。幼いボクは本気で信じてた。あれ以来、ボクはタンポポが怖くてしようがないんだ。小学校の遠足で、いじめられたよ。あいつ、タンポポが怖いんだぜって、帽子の中やシャツの襟から黄色い花を入れられて泣いたことなんて母さんは知らないだろう」

「つまらないこと言っていないで、勉強しなさい」

「母さん、どこ見てんだよ。ボクはこっちだよ」

母さんは、ボクから90度右を向いて喋っている。壁に向かってしゃべってる。壁——そうだ、ここはやっぱボクの部屋の中だ。何度、ユメから覚めても、ボクはこの部屋にいる。この部屋から出られないでいる。ユメから覚めないでいる。

「こっちを見ろって！」

母さんの手からM16を奪い返して、母さんに向けた。

「そろそろ、お夕食の仕度をしなくちゃ」

つぶやいている母さんに引き金を引いた。カチャッと空振る音が

した。弾切れだ。インポテンツのボクに母さんを撃てるはずがないのだ。

母さんが部屋から出て行く。

「待てよ！」

ボクの足はもつれるようにして進まない。水中で走っているようなもどかしさ。床に紙がばらまかれていて、走っても走っても紙に滑って前に進めない。

車を使おう。

そう思うと、ボクはまた車を運転している。東京の車道。シャドウ。

高いビルばかりの、碁盤目になった交差点。どこかゲームみみたいだ。同じ形状の車が渋滞している。けれどボクの車だけはその間を擦り抜けるようにして、全速力で走っていける。

視線の先には、母さんの車だ。赤い車。あの助手席にはもう一人のボクが乗っている。六歳から十六歳のぼくだ。ボクはぼくを助けなければならぬ。

母さんの車が右折する。

ボクは赤信号を直進する。どこかでパトカーのサイレンが聞こえる。子ウシを殺したボクを捕まえようとしている。射殺されるかもしれない。

行かなければならぬ、とボクは思う。

次の交差点。母さんの車の位置が、感覚的にわかる。ちょうど右からこつちに向かっている。ボクが右折すれば正面衝突するはずだ。ハンドルを回す。

赤い車が迫ってくる。しかしそこは鏡の世界だった。赤いと思っていた母さんの車は、鏡に映った自分の車で、消防車のように赤い壁だった。

(ぶつかる！)

と、思った瞬間、助手席にいる六歳から十六歳のぼくとボクは目が合った。

6歳

暗闇にいる。

宇宙に浮かんでいるような感覚。

(だけど、キミは宇宙に行ったことがないだろう。どうして想像できる？ またイミテーションか？)

それなら、水中だろうか。ボクはクラゲみたいに漂っている。海なら溺れたことがある。

だけど苦しくない。臍にチューブが繋がれていて、酸素と栄養が供給されている。チューブがどこまで続いているのかは見えない。ずっとずっと遠くまで延びて、なにかと繋がっている。

もしかもしゃという草を食む音がして、見るとバクがいた。白と黒の体をしたバクが、ボクの世界を食べている。

(キミはバクを見たことあるのか?)
ない。

いや、ある。

マレーバクを見たのは凶鑑じゃなくて、動物園だ！ 上野の動物園かな。でも白黒じゃなかった。パンダと記憶が混ざったのかな。

(上野にいるのはアメリカバクだ。キミが言っている白と黒のはマレーバク。どこか、別の動物園でたしかに見たんじゃないか?)

そうかもしれない。見たことがある。バクにもアメリカバクとマレーバクがあつて、体が白と黒のもしれば、黒一色のもしる。夢を食べるのもしれば、食べないのもしる。

(マレーバクの赤ん坊を覚えてるか?)

ああ、思い出した。赤ん坊は縞々なんだよ。たしかにどこかで見たんだ。マレーバクの赤ん坊は白黒分かれてなくてストライプなんだ。だんだんと毛が抜け替わつて、大人になるにつれて頭は黒で、下半身は白になつていく。

(きつと頭からだんだんと黒く染まっていくんだろうな。悪いものを食べるうちにだんだんと黒く染まっていくんだ。やがて全身が真っ黒になつたときにバクは死ぬんじゃないかな)

ボクは母さんにそのことを話した気がする。

(ああ、思い出した。あの時の記憶だ)

母さんは、ボクのコトバを無視して、檻の中のマレーバクを見つめていた。ボクの話聞いていたのかわからなかったけど、言った。

「バクは夢を食べるのよ。私の夢も食べてくれたらいいのに……」
「ユメを食べる？」

ボクは、まだユメというものがよくわかつてなかった。だから、エサなのかなつて思った。檻の中のバクが食べていた草がユメなのかなと思った。

でも、母さんはたしかにそう言ったんだ。考えもしなかったけど、母さんもユメを見るんだ。食べてほしいような嫌なユメを見ていたんだ。

(なあ、臭かったよな。動物園。動物って絵本やアニメじゃカワイク描かれてるのに、本物は臭くて、生々しくて、檻の中にいる。危ないから檻の中にいるんだ)

檻の中のバクが、むしゃむしゃと草を食べていた。

バクに食べられたユメは、お腹で消化されて、やがて糞として排出される。それは臭いのだろうか。それとも浄化されて細菌もない砂漠の砂みたいにサラサラしているのだろうか。そろそろ醒めなくてはならない。

20歳

目を覚ますとボクは檻の中にいた。刑務所の檻の中だ。それだけの罪を犯したのだから当然だ。

「もう、どうでもいい気分だった」

ボクの供述は、皮肉と怒りと冷笑をもってマスコミにとりあげられる。人間のクズ、人でなし、出来そこない、サイコパス、生きていく価値なし、死刑にしる。ボクを否定するあらゆるコトバが飛び交うだろう。

もちろん、ここだってユメの中だ。根拠もある。そう、三つの根拠。いつも辿りつけなかった三つ目の根拠も見つかった。かんたんなことだった。バクだよ。バクがユメを食べていたってことが、ここがユメである何よりの根拠じゃないか。最初からわかっていた。

ボクはこれまで目を覚ましたと思ったら、そこもまた夢の中だというユメを繰り返してきた。タマネギの皮を剥いても剥いても何も出てこないように、覚めても覚めてもユメの中にいた。これは、最後の夢だ。最後の一枚だ。

タマネギの最後の一枚を剥いたとき、そこにあるのはタマネギの本質か。何も残らないか。

キミは剥いたことあるかい？ 一枚一枚、指先で剥いていくんだ。地味でつまらない作業だけど、そうしてみることでしかわからないことがある。最後まで剥いて何もなかったかい？ ふたつめのタマネギを試したかい？ 三つ目は？ 涙が出なかつたかい？ タマネギの細胞から溢れた硫化アリルが粘膜を刺激して涙が流れる。いや、そんなことじゃないってば。科学はイミテーションだ。現実世界では役に立っても、ここでは知識はいらぬ。コトバがあれば十分なんだ。タマネギが何を意味するかなんてメタファーでもない。ボクらのやっつてるとは国語のテストじゃない。

「ここにタマネギがある」

そう思えば、タマネギがある。それだけのことなんだ。

この世界のこととは、みんなわかっている。わかっているけどコトバにはできない。覚醒と睡眠をくり返し、レム睡眠とノンレム睡眠をくり返し、だんだんと沖へと流されてしまう。それを一瞬だけ捕ら

えてコトバすることができても、次の瞬間には、それはまた別のものになっていて、別のコトバが必要になる。コトバを捨てて流されるままに海の藻くずとなるのもいい。けれど、何度も何度もコトバを拾って、舟を漕ぐみたい陸へ帰ることもできる。コトバはオルみたいなものだ。

母さんは自殺した。首を吊って死んだんだ。遺書はなかった。コトバは残さなかった。残さなかったことで、母さんはボクのココロで生きつづけている。本当はもっと早くに殺すべきだったんだ。例えば、ほら、十六歳の頃とかね。

「うるせえ、ババア」なんてコトバの暴力で、自立するべきだったんだ。

ずるずると流されてしまった。

バクが食べてしまったボクのユメ——忘れた記憶、あれこそボクが夢から醒めない原因だ。

「タ……」

母さんが言いかけたあのコトバのつづきを、取りもどさなければならぬ。

これが最後の夢になる。これからボクは最後の「冒険」に出るんだ。

まずはこの檻だ。今、ボクを閉じ込めているこの檻。握るとひんやりした、ざらざらした鉄の感触。鉄格子つてコトバに縛られているんだ。

こんなものはゴボウだっと思えばいい。あるいは英語にしたっていい。Iron cage。アイロンケージ。アイロン形似。鉄格子はアイロンに形が似ている。

いつのまにかボクの手にはアイロンが握られている。周りを見れば、ほら、ボクはもう檻の外にいる。そう、くだらないさ。ボクの今までの人生は、ずっとくだらなかつたんだ。今に始まったことじゃない。

さあ、ここはどこだ？

ああ、サバンナじゃないか。ボクが殺した例のホルスタインが倒れている。ボクが癩癩まぎれに殺してしまった子ウシだ。ボクは屈んで、横っ腹にできた銃創に手をおいてやる。

「可哀想なことをしたね」

手当てだ。ウシはビクンと体を震わせると、眠りから覚めたように首を起こした。まず後脚を立て、それから前脚を立てた。ウシが立ち上がる時はいつもこうやる。動物園で見たことがある。

「ほら、もう行きな。キミの母さんもどこかで待っている」

筋肉質の尻を叩くと、ウシは野原を駆けていった。振り返ると杖を持った老人が立っていた。

「らくだ色のローブを頭からかぶって、白くて長い顎髭をたくわえている。杖はオークかトネリコか材質は知らないが、もちろん歩行補助のためのものじゃない。いかにも魔法使いのおじいさんってやつだ。」

「オールドワイズマンだね」

「いかにも」と、老賢人は答えた。

「ボクが、どこへ向かったらいいか教えてくれるんでしょう？ それとも魔法のアイテムもくれる？」

彼はあらゆるゲームやアニメや神話で、その役目を果たしてきた。

「通過儀礼の必要な者を見つけて旅へ導くのがわしの役目じゃ」
ボクはにやけてしまった。

「どうした？」

「おじいさんの話し方だよ。その「わし」とか「じゃ」とかいかにも物語だなんて」

「おぬし……」

思わず笑い声がでた。

「ほら、また「おぬし」って」

「ふざけておるのか」

「ごめんごめん、不機嫌な顔にならないで、ボクを導いてよ」

「嫌じゃ」

「怒らないでってば」

「わしはもう帰る」

ワイズマンはくるつと背を向けて去ろうとしたので、ボクはあわててその腕にしがみついた。

「ごめんなさい、老賢人さま。どうか、ボクは導き下さいませ」

大袈裟だと思ったけど、片膝をついて跪いてみた。ワイズマンはボクを見下ろしながら、渋い顔をしてほうきみたいな顎髭を撫でていた。呆れ顔。もう一押ししよう。

「未熟な自我ゆえ、老賢人さまに失礼をいたしました。あなた様の助力なくして旅立つことはできません。なにとぞ、愚かな者にお力をお貸し下さいませ」

「ふむ」と、ワイズマンは機嫌を直して杖の先を地面に突き刺した。ちよろいもんだ、と思った。もちろん口には出さなかったけど。こんな風にコトバを操ることができたら、ユメに囚われることもなかったんだらう。

「よく聞くのじゃ。この道をまっすぐに行くと山道につながる。人

の立ち入らぬ険しい山じゃ。その山奥深くに男が住んでいる。ドールという男じゃ。おぬしはその男に会わなくてはならない。ドールの助けなくして魔女を倒すことはできないからじゃ」

「わかりました、賢者様」

恭しく頭を下げた。ボクは魔女を倒さなくてはならない。言われないでもわかっていた何となく思っていたけど。言われてみると、やっぱりそうなんだって思う。

「行け、ハルヒト！ 行つて、世界を救うのじゃ」

勇ましく杖を構えたワイズマン。その左手首には銀色の腕時計が締められていた。何十年も前に就職した父さんが、初めての給料で奮発して買った機能性の高い腕時計。一度、壊れたけれど修理にだしてまだ使っている、そんな腕時計だ。

「賢者様。その腕時計をください」

「むむ、な、何故じゃ」

「冒険の途中で、必ず賢者様の助けが必要になりますゆえ」

「ふむむ。たしかにそうかもしれない」

ワイズマンはけっこう高かったんだけどなとか小声で呟きながら腕時計を外して、しぶしぶ差し出した。

「ありがとうございます」

ボクは両手でありがたく受け取った。

「この先、どんな危険が待っているとも知れぬ。くれぐれも気を抜くでないぞ」

それから、またぶつぶつと何か言うと、霧のように白い煙だけ残して老賢人は消えた。

ボクは立ち上がって腕時計をはめた。時刻は7時32分で止まっていた。

こんな形式に過ぎない。

腕時計にもオールドワイズマンにも、深い意味なんてない。この世界では決断することだけが本質で、その意味ではボクが旅立とうと思った時点で、ボクの旅は終わってる。だけど、形式的に旅に出るんだ。あのおじいさんは、一つだけいいことを言っていた。通過儀礼というコトバ。儀式には形が必要なんだ。形骸化して、その本義も忘れ去られたような作法でも、ボクらは従わなくてはならない。なんで、こんなことしなきゃいけないんだよ、なんて去勢——虚勢を張っても、決められて形式に逆らうことにはコトバにならない畏怖の念を感じる。太古からつづく物語という形式にボクらは縛られている。だからボクは旅に出なくてはならないんだ。

ワイズマンに示された道を進んでいくと、やがて森に入っていた。

どこかで鳥が鳴いている。熱帯雨林に鳴く鳥。さらに奥地へ進むと大きな川が行く手を阻んだ。

ミルクコーヒーみたいな茶褐色の川で、対岸まで三〇メートルはある。アマゾン川かもしれない。泳いで渡れないこともないけど、ワニでもいるかもしれない。

どうしたものか、と腕を組むと都合よく案内人が現れた。

「この川を渡りたいのか？」

声の主は足元にいたカエルだった。

「キミは？」

「水先案内人」

どこか誇らしげにゲゴと喉を震わせた。

「おいらは両生類だからね。水も陸もおいらの住み処さ」

若草みたいな緑色した、いかにもなカエルだった。せっかくのユメの中なのに、つまらないなと思ってコバルトブルーなんかどうだろうと思ったら、その色に見えた。水だからブルーってのも安易だな、じゃあ、いつそ現実にはいない色にしようと、オレンジとかレッドとかにしてみたけど、毒持ちのカエルで見たことがある。

「おいらの体で遊ぶのやめてくれないか」

「遊んでるんじゃない。探してるんだよ」

「なるほど。子どもにとつての遊びは世界を理解しようとする挑戦である。と、そう言いたいんだね」

「ただ水先案内人のキミにふさわしい色があるんじゃないかって探してただけだよ」

「見つかったかい？」

「見つからない」

「どうせなら温かい色にしてくれよ」

「じゃあピンクにする？」

「悪くない」

案内人はリロロと鳴いた。色が変わると鳴き声も変わるらしい。

「キミは、ボクを向こう岸まで送り届けてくれるの？」

「やってやれないことはない」

「回りくどい言い方だね」

「寓話だからね。どうでもいいことを意味深に言ってみただ」

「この川は危険なのかな？」

「危険じゃない川なんてないよ」

川上から音もなく三角の背びれが流れてきた。ワニじゃなくてサメがいるらしい。水中に棲む危険な生物ならワニもサメも同じだ。背びれはボクらの前でくるとターンして、川を巡回している。

「水先案内カエルくん、キミの背中に乗れば渡ることができると思う」

リロリロ。慌てた声だった。

「そいつは勘弁してくれよ！ おいらが、この世界で一番嫌いなこととは何か知ってるかい？ それは人を背中に乗せるってことなんだ。見てくれよ」

カエルはびよんと跳んで背を向けた。

「穴があるだろ？」

彼の首のあたりには空気栓——浮輪とかビーチボールを膨らませるときに空気を吹き込む栓があつて、体に押しこまれていた。

「穴ってこれのことかい？」

「きやはっは。触らないでくれ。くすぐりたいじゃないか」

「敏感なんだね」

「ああ、だから人を背中に乗せたくないんだ」

「それじゃあ、ボクはけっしてキミの穴には触れないと誓うよ。だから、ボクを向こう岸まで乗せてくれないかな？」

「誓うと言われても信じられるもんか。人間はやるなどと言われるとやりたくなる生物じゃないか」

「考えてみてくれよ。もしもボクが誓いをやぶってキミの穴に触れたとしよう。キミはくすぐったくて、さつきみたいに体をよじるだろう。ボクは落ちてしまうかもしれないし、キミの穴の蓋が開いて空気が抜けてしまうかもしれない。いずれにせよ、ボクはサメに喰われてしまうじゃないか。ボクにとつて、キミの穴に触れて良いことは何もないんだ。ボクは向こう岸へ渡る必要がある。そのためには、たとえキミの穴に触れたい欲望が湧き上がって堪えなくてはならない。」

「わかったよ。ハルヒトくん。あんたを信じてみよう」

カエルは大口を開けて、喉を風船みたいに膨らませた。それをごくりと飲むとカエルの全身が膨らんだ。そのまま、ぴよんと川に跳び込むと浮き輪みたい浮いた。

「さあ、乗った乗った。漏れないうちにね」

ボクは裸足のまま——このとき初めて靴を履いていないことに気が付いた——彼の背中に足をかけた。踏んだところがぐにやりとへこんだ。沈まないのを確かめながら少しづつ体重をかけていった。沈まなかった。倒れないように気をつけながら、あぐらをかいて座った。

「乗れたよ。よろしく頼む」

「オーケー」

カエルはゆつくりと岸边から離れて進みはじめた。サメが近づいてきたけど、襲ってくる様子はなかった。

「おいらのこと、毒ガエルと思ってる。このピンクの体だもん。でも、手なんか伸ばすんじゃないぜ。狙い撃ちされるかもしれない」「狙い撃ち？」

聞き返したけど、それについては何も答えなかった。

浮き輪カエルはゆつくりゆつくり進んだ。見ると後ろ脚を引き付けて蹴っている。平泳ぎの蹴り方だ。でも、その脚は短くてちっとも推進力を生まない。ふーと息を吹きかけて、その吐息を帆で受けて進むヨットってかんじ。サメはボクらのそばで、隙あらば喰わんと八の字に周回しているけれど、襲ってはこなかった。

ボクはだんだんと、こののんびりした展開に退屈してきた。子供向けの昔話だった。飽きてきたといってもいい。ゆらゆらと進みながら、もう恐ろしいことは何も起こらないという慢心が湧いてきた。このつまらない日常がいつまでも続くような気がして嫌気がさしてきた。そんなとき人は遊びを考える。遊びは残酷であればあるほど刺激的なのだ。

ボクはカエルの空気栓を指先でほじくった。

「くわあっ、何するんだ！」

「ごめんよ。足が痺れたきたから体勢をかえたら、つま先があたつたんだ」

「それならしようがない。でも気をつけてくれよ」

「ああ、気をつけるよ」

それから一分もしないうちに、ボクはまたほじくった。押しこまれていた栓がぷくつと立ち上がった。

「くわわわっわ、あんた、正気か？ おいらが沈めば、あんただつてあのサメに喰われちゃうだぞ？ 触らないって誓ったじゃないか」

「もう触らない。改めて誓うよ」

「ああ、あんたを信じるよ」

カエルが言い終わらないうちに、ボクは指先で弾いた。空気栓の蓋が外れた。

「つかああ」

素っ頓狂な声だった。体の内のやわらかい部分を不意に掴まれたときに発せられる、理性というベールが剥がれた声だった。

「あんた、何てことしてくれたんだ？」

穴からはシューと空気が漏れていく。それを見て、ようやくボクは蓋を嵌め戻そうとした。けれど思うように嵌まらない。

「ムダだよ。一度、空いてしまった穴は埋まらない。もう二度と元には戻らないんだ。わかってただろ？」

「そうだ、わかっていた。わかっていたけど、ボクは我慢できなかったんだ。」

気の抜けたカエルの体がしぼんでいき浸水しはじめた。

「なあ、ハルヒトくん。あんた、誓っただろ。けっして触らないって。なのに、どうして触っちゃったんだ。人間ってのが、おいらにはつくづくわからない」

「そうだね。ボクにもわからない」

ボクの左足がずぶつと水中に落ちた。サメが潜った。ふくらはぎに噛み付かれる感触があつて、そのまま引き摺り込まれていく。首まで沈んだとき、酸素を貯めようとボクは息を飲んだ。沈んでいく。落ちていく。ボクは手足をバタバタさせる。けれど掴まれる取っかかりがなくてコントロール不能だった。

流れに身を任せることにした。任せてみると、それほど嫌でもない。落ちることこそ正解だったんじゃないかとすら思う。いや、正解は言い過ぎか。川を渡り切れるなら、その方がよかった。けど、挫折してしまったのだから、受け入れるしかない。胃が浮き上がって心地わるい。だけど、それだけのこと。ジェットコースターみたいなもんだ。

（あれ、ジェットコースターなんて乗ったことあつたっけか？ 乗ったことがあるとしたら遊園地に連れていってもらったことがあるのか？ 母さんに？ それとも父さんに？ また、イミテーションか？ でも、この胃心地の悪さは本物だ）

堪えきれなくなつて止めていた息を吐く。吐ききつて吸おうとすると、吸えた。そこはもう水中ではないらしかつた。胃の浮き上がりも収まっている。サメに噛みつかれた左足は少し痺れている。

ゆっくりと目を開いた。

目の前に青が広がっている。仰向けに寝ているボクの目の前に広がる青は、海ではなくて空だった。起きて、見下ろすと雲海が広がっている。ここは山の頂きだった。雲より高い山らしい。ゴツゴツした岩場。どこの山か——知っているはずだが名前は思い出せなかった。一度だけ、父さんと山に登ったことがある。そのときボクは雲海を見たんだ。

地平線に目をやるとクラクラした。雲との境界だから雲平線とでも呼んだ方がいいのかもしれない。青い空と白い海の狭間を見極めようとすると、呑み込まれそうで平衡感覚が乱される。ボクは掴まるように岩に手をついた。

ボクただ一人が、音もない圧倒的な孤独の中に取り残されている。一切の感覚が取り除かれた意識をありのままに感じているような、寂しさと恐ろしさに包まれた。

(それでも……行かなければならない)

立ち上がって、小石に躓かないように注意しながら歩きはじめた。足元ばかりを見て歩いた。そうしないと気が狂いそうになるのだ。

ボクはこの旅を悔っていた。しよせん形式だった寓話に過ぎない、とバカにしていた。結局はハッピーエンドで終わるのだと高をくくっていた。だけど、人を安心させるだけが物語の役割ではないことに気付きはじめていた。

しばらくすると山小屋が見えてきた。いかにも昔話の木こりが住んでいるような家だ。きつと絵本で見たんだろう。ボクはだんだんと幼少期の記憶に近付いているんだ。

「ドールさん、いますか」

閉じられた小屋の扉に立って、ボクは呼びかけた。

「ドールさん、いますか。あなたに会いにきました。ドールさん」

名前を三度呼ぶと扉が開いて、青白い顔をした男が顔を出した。白い無精髭の浮いた猫背の男だった。男の体から葱みたいなツンとする匂いがした。

「あなたがドールさんですか？」

彼は答えなかったけど、目がそうだと言っていた。大きくてぎよろついた眼球。

「力を貸してくれませんか？　魔女を倒しに行かなければいけないんです」

男がボクを見つめる。試されているような間。目を逸らさなかった。

男は小屋の中に入って行った。扉を閉めなかったので、入れという意味だと思って、ついていくと、彼は驚いたように振り向いた。どうして入ってくるんだ、という目だった。

「入ってもいいですか？」

やっぱり何も言わなかったが、目から好きにすればいいという色が伺えたので、入ることにした。

部屋には暖炉があった。レンガ造りの暖炉で火は消えていた。絨毯が敷かれ、正方形のテーブルが置かれていた。奥にはキッチンが見えた。童話風のキッチンがボクには浮かべられなかったらしく、そこはシステムキッチンだった。蛇口と流し台があってガスコンロが三つ。取っ手を引けば食器洗浄機になっているかもしれない。冷蔵庫とオーブンレンジもあって、そこだけ現実のうちと同じだった。

男はカップに飲み物——香りでコーヒーだとわかった——を入れて戻ってきた。別に飲みたいとは思わなかったが、ボクの分はなかったし、訊かれもしなかった。

「あなたはドールさんですか？」

男は壁際に立ったまま、湯気の立つコーヒーを啜っている。

ボクは一方的に語った。ユメから醒めるために魔女を倒さなければならぬこと、オールドワイズマンに出会って、ドールという男の協力を得るように言われたこと、それから川を渡ろうとしてカエルの背に乗ったが沈んで、ここにやってきたこと。

「カエルなら知っている」

男が初めてコトバを發した。聞き覚えのある声だった。

「あいつは両生類だ。水中で卵から孵り、やがて足が生えて、陸へジャンプする。水と陸という二つの世界の境界を跳び越える」

ボクは男の瞳孔が珍しい形をしているのに気がついた。縦長の楕円形になっていて、白眼は濁っていた。

「では陸地で生まれた人間は、どこに向かってジャンプすればいい？ 空か？ 宇宙か？ 海へ還るか？ それともビルの上から跳んでゾンビになるか？」

「魔女を倒さなくはいけません。それにはあなたの力が必要なんです」

「私なら魔女を倒すこともできるだろう。それは私の務めでもあった。だが、もう昔のことだ。魔女がいつ生まれたかは知ってるか？」

「知りません」

「君が生まれてからだ。君が生まれる前はとても優しい妻であった」「つまりボクが生まれたのが間違いだったのですか？」

「そうだ。君が私の妻を魔女にしたんだ。だが、彼女自身にも原因がないわけではない。悪魔に魅入られる隙が彼女にもあった」

男はカップをテーブルに置いて、
「薪をくべよう」と言った。

丁寧なゆっくりとした動作で、暖炉に薪を放り込み、マッチを擦って火を点けた。男は父親を演じようとしている。父さんと山登りをした記憶の断片だろうか。あるいは、それがボクの願望なのかもしれない。

「彼女は魔術を手に入れた」

男はロッキングチェアに座って、パイプをくわえた。

「魔術には中毒性がある。新しい力で、それまでの悩みがすべて解決したような気になる。重大な悩みだと思っていたことが些細なことと囚われていただけのように感じられ、人生の秘密を解き明かし

たような気にさえなる。だが、まやかしに過ぎない。人生には秘密もなければ解決もない。苦しいけれど生きていかなくてはいけぬ、それだけが本当なんだ。それに耐えられない者が魔術に手を染める。脳内でドーパミンやエンドルフィンが放出されて肉体も蝕まれ、刺激なしでは生きられなくなる。君はその誘惑に耐えうる覚悟はあるのか？」

「ハッピーエンドでは終わらないってことですね」

「私はペシミストだ。私の父も母もそういう性格だった。けれど、そんな自分を否定されたいと願っていた。この世界には明るくて幸せに満ちた世界があると、どこかで期待していた。だから、魔術のとりこになる彼女を見ながら、どこか羨ましくも思っていた」

「あなたは無責任です。義務を放棄した。そのツケが息子であるボクに回ってきている」

「その通りだな」

男はパイプを吸って、溜息まじりに煙を吐いた。

「どうしたら魔女を倒せるのですか？」

「君は彼女を殺せるのか？ 本当は愛されたいんじゃないのか？」

「倒したいです」

「倒すじゃない。殺せるのかと聞いているのだ」

ボクは無意識に避けていたコトバを明示されて、一瞬たじろいだ。

「……殺します」

わかった、というように男は深く頷いた。

「魔女を殺すには聖剣がいる。東の洞窟にあつて巨大な大蛇が守っている。大蛇はキミに三つの質問をするだろう。キミは何を聞かれてもYESと答えなければならぬ。さすれば大蛇は聖剣を授けてくれるだろう」

「わかりました」と、ボクは頷いた。

「それから、これを持っていくといい」

男は冷蔵庫へいって、長葱を一本取り出してきた。

「どうして葱なんですか？」

「匂いが強いものは魔除けになる。ニラやニンニクでもいいんだが、今は葱しかない」

ボクは長葱をもらって小屋をあとにした。

山道はどこも霧がかつていた。太陽も月も見えない。存在しないのかもしれない。天はぼんやりと明るいだけで、どっちが東なのか検討はつかなかった。昼か夜かわからない。ワイズマンにもらった腕時計は止まったままだった。

こっちだろうと見当をつけて進んでいくと切り立った岩壁に穴が

ぼっかりと空いていた。そうだった、ここでは東と思えば東になるのだ。

洞窟は真っ暗だった。灯りが何もなかったもので、右手で壁に触れながら進んだ。どこからか水が染み出ているのか、壁は湿っていて、すこしねばついていた。穴自体が生きものみただった。

やがて奥に白い光が見えてきた。進めば進むほど光が大きくなってくる。最奥部に近付いているのだ。

光に全身を包まれ、眩んだ目をゆっくり開けると、大きな広間に出ていた。子宮のようなぼっかりと丸い空間で、壁がほんのりと白く輝いていた。その部屋いっぱい、見上げるほどに大きなへびがとぐろを巻いていた。赤い艶々とした林檎の皮のようなへびだった。

ボクの気配を察したのか、にゆうと頭部が伸び上がって、チロチロと真っ赤な枝分かれた舌を出し入れした。

「臭う。臭うぞ。オマエの臭いか。いやにくさいぞ」

「聖剣をとりにきました」と、ボクは告げた。

「ならば三つの問いに答えよ。汝の答えが聖器を与えるに相応しいものであれば授けよう」

大蛇は尻尾の先を地面に叩きつけた。ドスンという地響きがして、どこかで砕けた小石がばら落ちた。

「一つ。汝は魔女を殺したいか」

「YES」

「一つ。汝は魔女を殺したいほどに憎いか」

「YES」

「一つ。汝は魔女を殺したいほどに愛しているか」

「NO」

ボクがドールのコトバに従わなかったのは、カエルに穴を開けたのとはちがう。あときは、どうしてそんなことをしたのか自分でもわからなかった。けど、いまはわかって、そうしたのだ。誤っているとはわかっていても選ばざるをえないときがあるのだ。

「オマエは正しい答えを導き出せなかった。聖器を持つにふさわしくない。よって死をもって贖わなければならぬ」

へびは大口をあけて喉の奥から白い液体を噴射した。ボクは全身が濡れになった。ネバネバして、くさかった。

ボクは葱を引き千切って、匂いの強い切り口の方をへびに向けた。「くさい、くさいぞ。この臭いは葱か」

さらに千切りって、へびの顔に掲げながら、へびの体をよじ登っていった。

「やめろ、やめてくれえ。くさい、くさくてかなわん」

長い舌をわなわなと震わせて痺れている。開いた喉の奥に白銀に輝くものがあつた。ボクは大蛇の口に跳び込んで、それを抜いた。何のことはない聖剣とは果物ナイフだった。

そのとき大蛇の喉が動いた。

へビの唾液が津波のように押し寄せてきてボクの体をさらった。長い食道を滑り落ちていく。ボクの体は奥へ奥へと流されていく。白い海に沈みながら流れに身をまかせた。いよいよ対決するときが来た、と思うと、次の瞬間にはボクは立っていた。

目の前には白い扉があつた。辺りは暗闇に包まれていて他には何もない。この扉を残して、あとはバクに食べられてしまったのかも。しれない。

ボクは最後の扉に手をかけた。

部屋には――そこを部屋と呼ぶのかもわからないが、ただボクと吊された魔女だけがぼんやりと白く照らされていた。

魔女は一糸まとわぬ姿で、首を吊るされていた。乳房も陰毛もはつきり見えるが、もちろん、そんなものがボクを欲情させることはない。エディプスコンプレックスは母への愛情ではなく憎しみだ。父から奪って独り占めしたいのではなく、殺したいのだ。

魔女を吊っている紐は布を縫い合わせて紐状にしたもので、小さな頃に言うことをきかないボクを縛りつけるための使われた紐だった。吊している先はぼんやりと白い靄に隠れて、天井は見えないが魔女はボクよりちよつと高いところに吊されていて、眠っているようだった。

このまま聖剣を突き刺せば、この悪夢は終わる。だけど、そうしようと思うのにボクの体は思うように動かなかつた。ボクのユメなのに、思うように動けないのだ。

花がひらくみたいに魔女の瞼が開かれた。真っ黒い真珠のような瞳が輝いた。

「ハルヒト……」

「おはよう、母さん」

「どうして、こんなところまで来たの？」

「母さんの寝室から物音がしたから」

「物音、何の音かしら」

魔女は吊されているのに気付くと、首を締めつけている紐に手をやって、蓑虫みたいに揺れて苦しがつた。

「何なのこれ、ハルヒト、下ろして！ 私を助けて」

「自分で吊ったんじゃないか」

「わたしが？ どうして、わたしがこんな……」

「母さん、聞きたいことがあるんだ。それに答えてくれたら楽にしてあげるから」

「楽につて……あなた、そのナイフでわたしを殺す気？ ハルヒト、わかっているの、わたしはあなたの母親なのよ！」

「あの日、ボクは母さんの部屋で何かを見たはずなんだ。生涯のトラウマになるような何かを……おぼろげには覚えている。だけど、はっきりと思い出せない。こうしてユメの中を旅してきたのは、すべてはそれを知るためなんだ」

「とにかく下ろしてちょうだい。そしたら何でも話してあげるから」
「ダメだよ。下ろしたら逃げるだろう。ボクはまた夢に囚われつづけることになる。ようやくここまで来たんだ。下ろすわけにはいかないよ」

魔女は急に静かになった。

「あの日っていつのことかしら。交通事故を起こした日のこと？」
「とぼけるなよ。あの日はあの日。バクに食べられたあの日の記憶だよ」

「もうバクに食べられてしまったんでしよう？」

「だから母さんに訊きに来たんだよ。それを知ったらボクは母さんを殺さなくてはいけないだろうね。でも、ココロのどこかでは、それを知ることができないで母さんを殺さない選択肢もあるんじゃないかって期待もしている」

「あなたって哀れね。わたしがいないと何にもできない。わたしが死んだというのに、こんなところまで会いに来て。よっぽどママのおっぱいが恋しいのね」

「ボクなんか生まれなければよかった？」

「ええ、あなたさえいなければ、すべてうまくいったのよ」

どこからか、むしやむしやと食む音がした。どこからバクがこの部屋も食べ始めている。

「母さん、教えてくれよ。あの日ボクは何を見たんだよ？ 母さんはあの時、何て言ったんだよ」

「教えるわけないでしょ。あなたは永遠に苦しめばいい。ふふっ、ふふふふ」

「あの時、たしかに何かを言っただろ。タ……」

「タ……」

「そうだよ。何て言おうとした？ その、たったひとつのコトバを求めて、ボクはここまでやってきたんだ」

「ハルヒト、もう憶えてないのよ……」

「ウソだ！ 教えてくれよ、母さん！」

ボクは魔女の脚にしがみついた。冷たい脚だった。
 「教えてよ……ボクはあの日いったい何を見たんだ。母さんは何て言ったんだ……」

「ごめんなさい、ハルヒト」

魔女の手がボクの頭を撫でた。

「ここまで来たご褒美をあげるわ」

魔女の手にはナイフ——ボクの手にあつたはずの果物ナイフと林檎が握られていた。赤い艶々した林檎だった。剥かれた林檎の皮はらせん状に、するするとボクの顔まで落ちてきた。皮から甘い林檎の香りがした。

バクが部屋を食べている。ボクと母さんを包む光りが失われていく。ボクは魔女と一緒に何かに縛られた。母さんが、ボクを縛ったのかと思つたが、母さんも一緒に縛られていた。あたりが黒い繭に包まれていく。

（そうか、蛹になるんだ……）

視界が塞がれていくなかで、母さんの声が聞こえた。

「何て言ったか、教えてあげましょうか？　誕生日おめでとう、つて言ったのよ、ふふふ」

最後に見えたのは、左腕に締めた腕時計だった。オールドワイズマンがくれた止まったまま時計の、長針が少しだけ動いた。バクは蛹となったボクも食べてしまうのだろう。

36歳

7時33分だった。朝だ。僕はカーテンを開いて、窓も開けて、確かめた。朝だった。

照りつける夏の陽射し。隣の家のベランダ。セミはまだ鳴いていないが、スズメがさええずつている。家の前を歩いていく男子中学生——通学の時間だ。遠くに見える高層マンションも昨日と変わらな
 い。ほんとうの朝だった。

（長い夢を見ていた……）

醒めてしまえば、それは一瞬の出来事だったように感じる。けれど一晩で一生分の夢を見てしまうこともある。何十年に及ぶ旅を一晩で経験することもある。昨日までの僕と、今日の僕はもう別人なのだ。

部屋を出て、母さんの寝室を覗くと、遺体はもうなかった。

階段を降りて、リビングキッチンへ行くと、父さんがコーヒを飲んでいた。

「僕もコーヒもらつていい？」

返事はなかったが、父さんはキッチンへ行って僕のためにカップを出してくれた。インスタントコーヒーの缶を開けて、スプーンで一杯掬ってカップに入れて、また蓋を閉じて戸棚にしまった。ポットからカップにお湯を注いで、掻き回してから僕の前に置いた。砂糖とミルクはいるか聞かれなかった。カップの中には吸い込まれそうなブラックコーヒーが入っていた。目の醒めるような茶色い香りがした。

「母さんのことなんだけど……」

父さんが僕を見た。

「警察にはもう連絡したの？」

「何の話だ？」

「母さんの……遺体のことだよ」

「……」

父さんは考えるようにしてコーヒーを啜っている。人形ではなく人間の顔をしていた。

「昨日、首を吊った母さんの……」

「何を言ってるんだ？」

訊ねるでもなく咎めるでもなく、ただ僕の言葉を遮るために言ったような響きだった。

テーブルクロスに汚れが残っていた。液体だったものが乾いて固まっている。錆びた赤茶色の染みだった。もとは血のように赤かったのかもしれない。

「母さん、浮気してたんだよ……」

父さんはじつと僕を見つめてる。また変なことを言うと思ってるのかもしれない。

「僕が六歳の時だよ。僕はテレビゲームをしていた。その頃、僕の部屋は、まだ僕の部屋じゃなくて、ゲームが置いてある部屋で、ゲーム部屋って呼んでたでしょ。父さん、憶えてる？」

「憶えてないな」

「あの日は八月だったかな。よく覚えてないけど夏だったよ。父さんは仕事に行ってるから家にいなかった。ボクは母さんに決められた時間をオーバーしてゲームをしたから、いつ怒られるかと思つてひやひやしなながら、ゲームに夢中で止められないでいた。そのとき隣の部屋から物音がしたんだ。母さんと父さんの寝室の方から、何かが崩れるような音だった。母さんが僕を怒りに来たと思つて僕は咄嗟にテレビを消して、ゲームはもうやめましたってフリをして待っていたけど、母さんは一向にやってくる気配はなかった。それから隣の部屋から声が聞こえた。僕は小さかったから、母さんが泣

いてる声だと思った。それで子供心に心配になって寝室に向かったんだ。母さんはベッドに倒れていた。服が乱れていて、母さんに覆い被さるように男がいた。顔は憶えていない。思い出せないというか……この記憶すら、さつき目を覚ますまで忘れていたんだ。男は父さんだったような気もする」

「私は仕事へ行っていたんだろう」

「そうだね、そうだよね。父さんじゃないんだ……その男は僕に気がつくどゆっくりと近づいてきた。男は下着を脱いでいたから下半身が剥き出しだった。僕は勃っているアレを初めて見た。へびみたいだって思った。男は僕の首をつかんで物置に連れていった。二階の廊下にある物置だよ。その中に僕を押し込んで、扉を閉めると『騒いだからおちんちん、ちよん切っちゃうからな』って言ったんだ。その後……よく覚えていない。その日の夕食のあとに、母さんが林檎を剥いてくれたのを、なぜだか鮮明に憶えてるんだ」

父さんはコーヒートを啜ってから、

「そんな事実はない」と、言った。

「父さんが認めたくないのはわかるよ……」

「お前は現実と夢の区別がつかなくなっているんだ。だから、訳のわからない物語をつくりあげて現実逃避しているんだ」

「でも父さん、わかるでしょ。精神科医なら夢が大切だってことぐらい」

「誰が精神科医だって？」

「父さんだよ」

「私は精神科医じゃない」

「もう辞めたんだっけ？」

「もともと精神科医なんかじゃない」

「なんで、そんな嘘をつくんだよ……」

「……」

「父さん？」

見ると、父さんはまたドロイングドルになっていた。力なく腕と脚を垂らして、傾いた顔でこちらを向いていた。テーブルに置かれたコーヒーが、湯気を立てて香ばしい匂いを漂わせている。

「父さんが信じてくれなくても、僕には物語が必要なんだよ……」
父さんの手書きで書かれた眼球は、もう動かなかつた。

家の外で、むしやむしやと何かを食む音が聞こえる。

(了)